十全同窓會會報

（題字：佐藤 保 十全同窓会会長）

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会会報
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷㈱

医学部創立百五十周年記念事業の進捗状況

金沢大学医学部創立百五十周年記念事業実行委員会委員長
金沢大学医薬保健学域医学類長
山本 健

十全同窓会会員各位の絶大なるご支援を得て、去る七月七日（土）、医学部創立百五十周年の記念式典・記念講演会・モニュメント除幕式・祝賀会が盛大に挙行されました。詳細は本会報「創立百五十周年祝典号」をご覧下さい。

一．皆さまからお寄せいただいた百五十周年記念事業寄付金についてご報告いたします。

本年八月十三日現在、寄付金総額は一億五百三十八万七千七百五十五円（二千四百九十六件）です。この中には個人会員あるいは団体からご寄付いただいた一千万円以上（三件）、百万円～六百万円（八件）、個人会員あるいは同窓会支部・クラス会単位でご寄付いただいた五十万～百万円（六件）が含まれます。寄付金総額のうち一千二百五十八万五千円は、平成二十年（二〇〇八）六月から金沢大学医学系教員と病院教員が毎月積み立てて来た寄付金です。ご寄付を賜りました同窓会員各位並びに教員各位のご協力に対して、心から御礼を申し上げます。

図1　記念モニュメント「医の源流　未来への継承」。正面中央が宮北徳（立位）、宮北に向かって右は稲坂謙吉（座位）、左は上杉寛二（座位）。

二．七月七日の祝典関連の支出概算額を、速報としてご報告します。記念式典関連五十万円、記念講演会関連五十六万円、モニュメント関連二千五百八十万円、祝宴関連九百十五万円、計約三千六百壱万円の支出になりました。

三．創立百五十周年募金は、二〇一五年（平成二十七年）三月までの予定になっております。その時点までの募金の使途は、すでに着工あるいは挙行した事業に四千万円、今後着工する十全講堂から医学類正門までのメインプロムナード整備事業に八千万円、計一億二千万円を目標にしております。祝典が終わった現段階で、プロムナード整備事業のために、一千百万円が不足しております。万事ご多端の折まことに恐縮ですが、まだご寄付をいただいていない関係各位におかれましては、記念事業達成のための募金の趣旨にご賛同くださり、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。本号に同封させていただく振込用紙をご利用いただくか、医学部創立百五十周年記念事業ホームページ（http://www.kikin.kanazawa-u.ac.jp/kikin_med150/）を通じてお申し込みいただければ幸いです。

四．金沢医学館第一期生を題材にした百五十周年記念モニュメント「医の源流　未来への継承」（図1）は、現在医学類正門駐車ゲートの病院側に位置しています。メインプロムナード整備事業では、現在の正門門柱を病院側に約五〇m移動し、正門から十全講堂が

目次

医学部創立百五十周年記念事業の進捗状況 …… 1
総会記事 …… 2
就任ご挨拶 …… 5
春の叙勲 …… 5
受章・受賞 …… 6
学会報告等 …… 9
国立大学法人病院病理部会議 …… 11
金沢大学関連病院長会議 …… 12
御遺骨返還式・合同慰霊祭 …… 12
病院紹介 …… 13
教室だより …… 15
支部だより …… 17
クラス会 …… 20
医師会コーナー …… 21
寄稿 …… 22
平成二十四年度オープンキャンパス …… 23
二〇一二年度医学展開催に向けて …… 23
十全昔話 …… 24
学生コーナー …… 26
ホームカミングディ …… 28
創基百五十周年記念留学生支援キャンペーン寄付募集 …… 28
ご協力のお願い …… 28
編集後記 …… 28

図２　メインプロムナード整備完成予想図。移動した正門、正門脇の記念モニュメント、医学類入り口前の高安右人像、正面奥が十全講堂。画面右側の建物はＥ棟、教育棟、Ｆ棟。画面左側の建物はＣ棟。

まっすぐに見通せる遊歩道を作る予定です。車両は正門を入るとすぐに左右の駐車場に誘導され、遊歩道には進入できない動線を考えています。この遊歩道は記念モニュメントのすぐ前を通りますので、整備事業が完成した時点で、記念モニュメントが本学類の顔として機能することになります。金沢市は医学類と附属病院に遊歩道を整備する計画を以前から持っていますが、金沢市による遊歩道整備事業と協調して、寄付金によるメインプロムナード整備事業を進めたいと思っています。以上を盛り込んだイメージ図（図２）をご覧下さい。

五．金沢医学館一期生群像モニュメントの人名が判りにくいとのご指摘がありました。

折角のモニュメントに名札を付けるのは蛇足と思われるので、モニュメント（図１）とモノクロ写真（図３）との対応をご説明します。モニュメントは、モノクロ写真を（印画面を外にして）筒状に丸めた位置関係になっています。

モニュメントの中で、一番背の高いのが宮北徳さん（附属病院を向いて立っています）。宮北さんを基準として、向かって右回りに上出達三、藤本純吉、三沢敬吉、須賀忠愛さんが立っています。宮北さんと背中合わせの位置に立っている藤本純吉さんは、左肘を軽く曲げているのが目印です。宮北さんに向かって右側に座っている大兵が稲坂謙吉さん。稲坂さんから右回りに、不破鎖吉、藤井貞為、上杉寛二さんの一期生が座っています。

図３　金沢医学館第一期生
前列向かって左より 藤井貞為、上杉寛二、稲坂謙吉、不破鎖吉
後列向かって左より 三沢敬吉、須賀忠愛、宮北徳、上出達三、藤本純吉
（金沢市医師会蔵）

総会記事

平成二十四年度十全同窓会総会開催

平成二十四年度の十全同窓会総会が去る七月七日（土）午前九時より、医学部記念館において開催された。今回は、医学部創立百五十周年記念式典に合わせての開催となり、遠くは沖縄、福島をはじめ、例年より多い十六支部の代表が出席された。まず、議長に佐藤保会長を選出し、同会長から挨拶があった。挨拶の中で、創立百五十周年記念事業への多額の寄附に対して感謝の言葉が述べられた。続いて六十名の物故者会員に黙祷を捧げた後、加藤理事長より昨年度の会務報告が行なわれた。次に、山本健学類長より、今春の医師国家試験の結果報告と、創立百五十周年記念事業および記念式典、記念講演会、祝賀パーティーの内容説明があった。次に、中村裕之医学系研究科副科長より、医学研究科報告が行われ、続いて高安賞の贈呈式に移り、最優秀賞　栂暁子博士（血管発生発達病態学）、および優秀賞　島啓介博士（脳老化・神経病態学）、孔丹博士（がん幹細胞学）、岡田亮博士（生体防御応答学）の四名の方が、表彰された。

その後議案審議に移り、大井会計理事から平成二十三年度会計決算報告が、ご欠席の倉西監事に代わり議長より監査報告があった。次に加藤理事長より、平成二十四年度の事業計画について説明があった。その中で、図書館医学分館の整備に対して同窓会より三千万円の寄附を行うことが発議され、拍手で承認された。また同窓会名簿作成への協力依頼についての話があった。引き続き大井会計理事より本年度の予算案の説明があり、拍手で承認された。次に役員交代の報告がなされた。主なものとして、松井修会計理事、倉西久雄監事が退任され、太田哲生会計理事、森紀喜監事の就任が承認された。その他の役員は、佐藤会長含め留任となった。

続いて、佐藤会長より医学部学生の課外活動（医学展、白山診療班、立山診療班等）への支援金・補助金の交付が行なわれた。

今回は、引き続き創立百五十周年記念式典が予定されていたため、三十分という時間制限の中で行われ、例年のような教授就任講演や懇親会は行われなかった。

（加藤　聖　記）

平成二十三年度決算報告ならびに平成二十四年度予算について

平成二十三年度決算

表1に一般会計の決算書を示します。会費収入は見込みに少し届きませんでした。雑収入ではＤＶＤ頒布に係る分配金が継続した収入となっています。

支出では、事業費が少々減額となりました。会報発送代が宅配便採用で減少したこと、ホームページに係るプログラム作成の中止などがその理由です。補助費は記念館整備が必要とされなかったためその分減少しました。予備費からは、座談会に係る費用、東日本大震災対応その他を支出しました。

全体としては、会費収入減で二十四年度への繰り越し金確保のため、基金への繰り込みは断念しました。

付随する特別会計では、十全同窓会基金会計は、資産運用で得た利息のみ。名簿作成会計では、免除会員の先生方からの賛助が収入となっています。高柳奨学金会計は、平成二十二年度は奨学生二名、平成二十三年度は奨学生二名に対して支給しました（表2～5参照）。以上の決算報告に対して監査理事から会計監査報告がなされ承認されました。

平成二十四年度予算

表6をご覧ください。会費収入は名簿改訂が行われるため、例年より少々増額を期待しました。

支出では前年度並としましたが、昨年末に作業が終了した会報デジタルアーカイブ作成費を予算し、学生課外活動や図書館などの課外活動、整備補助を計上しました。基金への繰込みに関しては会費の収入率が回復し、一般会計が軌道にのるまで調整した額としました。

小泉基金

平成二十一年度来審議を繰り返し、また小泉先生のご子息のご意向も確認できていることより、医学部創立百五十周年記念事業への資金として活用することとしました。

百五十周年記念事業としては、本年行われる記念式典の開催、記念施設設備（記念館改修工事・モニュメント建設）、記念誌の発行などを、募金活動を中心に考えられています。

また本学図書館からの要望を受け、医学系から依頼のあった図書館分館改築への寄附は、医学部創立百五十周年記念事業への寄附とは別に行うこととしました。

（会計担当　大井　章史　記）

名簿発送のお知らせと会費納入のお願い

十全同窓会名簿は本年12月初旬頃の刊行を予定しております。

名簿は平成23年度、24年度会費納入の方にのみ発送致します。

未納の方は至急お納めください。

（表1）平成23年度決算書

自　平成23年　1月　1日
至　平成23年12月31日

収入 科目	予算（円）	決算（円）	摘要（円）
前年度繰越金	2,405,901	2,405,901	
会費収入	12,492,000	12,226,000	平成23年度会費 4,000円×1464人　5,856,000 過年度分719人　5,484,000 平成24年度以降会費　300,000 準会員会費 6,000円×95人　570,000 4,000円×4人　16,000
雑収入	89,240	192,280	H22年度　SP研修会 支援金からの返金　91,516 DVD頒布に係る分配金 （KUTLOより）11部分　98,164 旅費返金　2,600
計	¥14,987,141	¥14,824,181	

支出 科目	予算（円）	決算（円）	摘要（円）
事業費	6,358,288	5,779,062	会報印刷製本代・座談会テープ起こし代　2,739,817 会報・アカンサス発送代　1,431,037 会費払込用紙・発送用封筒代　291,165 アカンサス印刷代　35,280 関連病院長会議・関連病院渉外費　200,000 卒前研修支援（SP研修会支援）　200,000 学生課外活動支援（西医体）　100,000 （立山診療班）　100,000 （白山診療班）　100,000 新入会員卒業祝（印鑑付ペン）　288,288 @2,772×104本 十全同窓会ホームページ制作　235,725 ホームページ「会員情報変更受付」サイト修正　57,750 ホームページブログ形式変更用プログラム一式　0 ホームページメンテナンス（2回/年）　0
旅費	1,000,000	821,040	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費　821,040 会報取材旅費等
会議費	450,000	359,278	総会、理事会、会報編集委員会、反省会　359,278
慶弔費	100,000	1,160	弔電　1,160
補助費	760,000	539,040	記念館展示室整備　0 図書館医学部分館整備補助　299,040 学生課外活動補助（ACLS）　50,000 医学展補助　100,000 Live Aid Kanazawa　70,000 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金　20,000 ホームカミングデイ開催負担金　0
事務費	3,350,000	3,343,913	会費払込料金、EPSONﾌﾟﾘﾝﾀｰ・感光体・ﾄﾅｰ、通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料　993,913
雑費	60,000	60,000	人件費　2,350,000
支部への補助費	500,000	430,000	会報袋詰め作業代　60,000
基金への繰込み	0	0	１１件　430,000
予備費	2,408,853	1,566,307	十全同窓会基金口座へ　0
繰越金		1,924,381	座談会開催・出席者招待旅費、東日本大震災対応（見舞金・旅費）、原稿執筆謝金、その他　1,566,307
計	¥14,987,141	¥14,824,181	

（表2）十全同窓会基金会計報告書

自　平成23年　1月　1日
至　平成23年12月31日

収入			支出		
			科目	金額（円）	摘要（円）
前年度繰越金	137,191,225				
繰入金	0				
利息	1,160,000	GEキャピタルコーポレーション利金			
	7,500	利付き国債購入時差額			
	46,951	北陸銀行大口定期預金利息			
計	138,405,676		計	0	残高　¥138,405,676

（表3）十全同窓会会員名簿作成会計報告書

自　平成23年　1月　1日
至　平成23年12月31日

収入			支出		
科目	金額（円）	摘要（円）	科目	金額（円）	摘要（円）
繰越金	2,288,771		事務費	600	払込手数料
協賛金	25,000	免除会員協力@5,000×5件	通信費	43,890	名簿発送料
計	2,313,771		計	44,490	残高　¥2,269,281

（表4）高柳奨学金会計報告書

自　平成23年　1月　1日
至　平成23年12月31日

収入			支出		
科目	金額（円）	摘要（円）	科目	金額（円）	摘要（円）
前年度繰越金	6,783,084		奨学金	150,000	H22年度　奨学生2名（25,000円/1ヶ月） 平成23年1月～平成23年3月分
利息	2,880	定期預金利息		450,000	H23年度　奨学生2名（25,000円/1ヶ月） 平成23年4月～平成23年12月分
計	6,785,964		計	600,000	残高　¥6,185,964

（表5）金沢大学医学部史会計報告書

自　平成23年　1月　1日
至　平成23年12月31日

収入			支出		
科目	金額（円）	摘要（円）	科目	金額（円）	摘要（円）
前年度繰越金	3,317,812				
利息	1,593	普通預金利息	—	0	
雑収入	0				
計	3,319,405		計	0	残高　¥3,319,405

会計監査報告書

平成２３年度　金沢大学医学部創立２・３百年祭小泉基金

上記会計科目報告の収入および支出に関し，帳簿および証拠書類に間違いなく，現在高についても相違ないことを確認した。

平成24年2月14日

監事　中尾真二

監事　倉西久雄

監事　正橋剛二

会計監査報告書

平成２３年度　金沢大学医学部十全同窓会会計
金沢大学医学部十全同窓会基金会計
十全同窓会会員名簿作成会計
高柳奨学金会計
金沢大学医学部史会計

上記会計科目報告の収入および支出に関し，帳簿および証拠書類に間違いなく，現在高についても相違ないことを確認した。

平成24年2月14日

監事　中尾真二

監事　倉西久雄

監事　正橋剛二

（表6）平成24年度予算書（案）

自　平成24年　1月　1日
至　平成24年12月31日

収入 科目	金額（円）	摘要（円）		支出 科目	金額（円）	摘要（円）	
前年度繰越金	1,924,381			事業費	8,186,972	会報・特別号印刷製本代	3,200,000
						会報・アカンサス発送代	1,600,000
						会費払込用紙印刷代	40,000
会費収入	13,592,000	24年度会費				アカンサス印刷代	50,000
		4,000円×1750人	7,000,000			発送用封筒代	350,000
		過年度分	5,500,000			関連病院長会議・関連病院渉外費	200,000
		平成24年度以降会費	400,000			卒前研修支援（SP研修会支援）	150,000
		準会員会費				学生課外活動支援（西医体）	100,000
		6,000円×112人	672,000			（立山診療班）	100,000
		4,000円×5人	20,000			（白山診療班）	100,000
						新入会員卒業祝（印鑑付ペン）@2,772×101本	279,972
						ホームページメンテナンス（2回/年）	25,000
						ホームページ情報更新（12回/年）	50,000
						会報製本（No.116-No150）2冊	42,000
						会報デジタルアーカイブ（No.1～No.150）	1,900,000
				旅費	1,000,000	各支部総会への出張費、各県支部長総会招待旅費、会報取材旅費	1,000,000
				会議費	400,000	総会、理事会、編集委員会、反省会	400,000
				慶弔費	100,000	香典・弔電等	100,000
				補助費	860,000	記念館展示室整備	200,000
						図書館医学部分館整備補助	300,000
						学生課外活動補助（ACLS）	50,000
						Live-Aid Kanazawa	70,000
						医学展	200,000
						「大学院医学系研究科」進学説明会補助金	20,000
						ホームカミングデイ開催負担金	20,000
				事務費	3,350,000	払込料金、ﾌﾟﾘﾝﾀ修理・感光体・トナー、通信費証明書発行手数料、文具、振込手数料、超過勤務	1,000,000
						人件費	2,350,000
				雑費	60,000	会報袋詰め作業代（年3回分）	60,000
				支部への補助費	500,000		
				基金への繰込み	0		
				予備費	1,059,409	名簿作成に係る謝金、その他	
計	¥15,516,381			計	¥15,516,381		

就任ご挨拶

筑波大学医学医療系 災害精神支援学教授に就任

高橋　祥友教授（昭和五十四年卒業）

平成二十四年四月一日付けで、筑波大学医学医療系災害精神支援学教授を拝命しました。

私は金沢大学医学部を卒業後、東京医科歯科大学（研修医）、山梨医科大学（助手、講師）、UCLA（フルブライト研究員）、東京都精神医学総合研究所（副参事研究員）、防衛医科大学校（教授）を経て、現職に至りました。メンタルヘルス、とくに自殺予防に関心を持って研究や教育を続けてきました。

私が精神科医としての第一歩を踏み出すにあたって、山口成良先生、伊崎公徳先生、越野好文先生、倉知正佳先生、小山善子先生、數川悟先生をはじめ、金沢大学医学部の精神科に関連する多くの先生方にご指導を賜りました。今でこそ、学生の病院実習はめずらしくありませんが、私が医学部五年生の春休みに福井県立精神病院に二週間泊りこみの研修の機会を設けていただいたことが精神科に進む大きな契機となりました。

筑波大学に新設された災害精神支援学講座では、被災者のメンタルヘルスはもちろんのことですが、わが国ではあまり関心を払われてこなかった救援者のメンタルヘルスにも焦点を当てて活動したいと考えています。今後ともよろしくご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

春の叙勲

瑞宝中綬章
本田　昂（II会員）

瑞宝小綬章
奥田　洽爾（昭和三十四年卒業）
久藤　豊治（昭和四十二年大学院修了）

旭日双光章
田中　久米夫（昭和三十七年卒業）
土田　豊（昭和三十八年卒業）

瑞宝双光章
服部　義明（昭和二十三年専卒業）

国立大学法人動物実験施設協議会会長に就任

浅野　雅秀教授
（学際科学実験センター実験動物研究施設）

この度、国立大学法人動物実験施設協議会（国動協）会長を拝命することとなりました。国動協は昭和四十九年に国立大学医学部の動物実験施設を中心に組織され、加盟校相互の緊密な連携により、我が国における動物実験の精度と水準の向上を図り、実験動物の飼養保管と動物実験の適正化を進め、医学・薬学・生命科学等における教育と研究の推進に努めて参りました。国動協は平成二十四年現在で六十一の機関が加盟しており、公私立大学実験動物施設協議会や厚労省関連研究機関動物実験施設協議会とも連携して、文科省や厚労省とも連絡を取りながら活動を推進しています。

バイオリソースとしての実験動物の開発・保存・供給体制の整備、データベースの構築、動物実験に関連した新しい技術の開発等、ポストゲノム研究や再生医学研究における実験動物や動物実験の役割は益々重要となってきました。特に遺伝子改変マウスが果たしてきた役割は大きく、今日の動物実験施設はどこも遺伝子改変マウスで満杯の状態となっています。

一方、国際的な観点からも適正な動物実験を行い、動物実験に対する社会的理解を得るために、法令や省庁の基準・指針の整備が進められました。「動物の愛護及び管理に関する法律」と「実験動物の飼養及び保管並びに苦痛の軽減に関する基準」を踏まえて、平成十八年に文科省から告示された「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針」及び日本学術会議が策定した「動物実験の適正な実施に向けたガイドライン」に基づき、学長の責務の下に機関内規程が制定され、動物実験委員会が様々な活動を行っています。国動協は我が国におけるこのような動物実験の自主管理体制の構築に大きく関わってきました。会長を引き受けたことにより、事務局が医学総務係になりましたので、事務方には余計な仕事をお願いすることになりましたが、国動協の重要性をご理解いただき、二年間の在任期間中よろしくお願いします。また、十全同窓会の先生方におかれましても国動協活動にご指導・ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

受章

岡田　晃　元学長
ドイツ連邦共和国功労勲章一等功労十字章受章

北陸日独協会名誉会長の岡田晃金沢大学元学長は、本年四月十一日にドイツ大使館にて森喜朗元首相、中村信一金沢大学長らの出席の下、ドイツ一等功労十字章を授与された。

岡田先生は札幌医科大助教授時代に西ドイツ（当時）マックス・プランク労働生理学研究所に留学し、その後北海道日独協会の世話人に就任。七十二年の札幌冬季五輪では国際冬季スポーツ医学会議事務局長としてドイツ選手団をもてなした。

同年、本学公衆衛生学教授に着任後、北陸日独協会理事になられた。九十三年からは北陸日独協会長として日独の文化、学術交流に尽力した。学長在任中には、本学とジーゲン大・レーゲンスブルク大の両大学と交流協定を締結された。

この機会に岡田先生のご経歴について述べておくと、大学紛争のあおりで、四十二歳で日本公衆衛生学会長、国際・全国学会十二学会の会長に就任されて、現在十二学会の名誉会員である。本学の医学部長に、講師以上の投票によって選ぶようになって始めて他大学出身者として就任され、学長として総合移転を完結された。塩田広重先生（外科の先駆者、浜口首相の手術で有名）で始まり、吉田肉腫の吉田富三先生も名を連ねた日本学術会議第七部（医歯薬学）長に選出されているが、東大関係者以外の部会長就任は稀な事であり、その他、国公私立の大学長で構成されている大学基準協会副会長にも選出されている。

このような名誉を祝して、金沢大学長・星稜大学長時代の関係者、北陸日独協会員、門下生が一堂に介して、七月七日にホテル日航金沢にて祝賀会が開催された。

（城戸　照彦　記）

写真説明：右から、ドイツ連邦共和国フォルカー・シュタンツェル大使、森喜朗元首相、岡田晃元学長、ドイツ大使夫人、中村信一学長（ドイツ大使館にて）

受賞

第六十五回中日文化賞受賞

分子神経科学・統合生理学教授
櫻井　武

中村信一学長のご推薦をいただき、光栄にも第六十五回中日文化賞を賜りました。受賞内容は、「オレキシンの発見とその生理的機能の解明」です。睡眠は脳のシナプス恒常性の維持にかかわり、脳および精神の機能の保全に不可欠である他、気分障害、アルツハイマー病などの危険因子にもなります。現在、睡眠に問題を抱える人は五人に一人に達しており、睡眠の問題が人々の健康や、社会・経済に及ぼす影響は想像を超えるものになっております。

私は一九九八年に新規脳内物質オレキシンを見いだしました。この物質が脳内でどのように覚醒を制御しているかを解明していく過程でこの物質が覚醒と睡眠の切り替え機構に深く関わっていることを明らかにしてきました。オレキシン系の機能低下はナルコレプシーをはじめとする過眠症の原因となり、一方、オレキシン系の機能亢進は不眠症と深く関わると考えられています。現在、複数の製薬会社で睡眠導入薬としてオレキシン受容体拮抗薬が開発され、二〇一四年には製品化が見込まれています。私自身の研究が直接創薬に結びついたのはエンドセリン受容体拮抗薬に続き二回目です。医学研究の目的は疾病の治療手段を提供することであり、大変うれしく思います。今回の受賞を励みに今後も新規生理活性物質の発見とその機能解析に携わり、微力ながら医学に貢献できればなによりの幸せです。

平成二十三年度（第八回）金沢大学十全医学賞受賞

血管新生・結合組織代謝学
長谷川　稔（平成三年卒業）

この度、〝全身性強皮症の臨床・基礎研究：病態解明と治療の確立を目指して〟のテーマで、第八回金沢大学十全医学賞を受賞させていただきました。身に余る光栄に存じます。全身性強皮症は、膠原病のひとつで、皮膚や内臓臓器の線維化、血管障害を特徴とする疾患です。有効な治療法が確立されておらず、間質性肺炎などで死亡する症例も少なくありません。このため、予後の改善には早期発見と有効な治療薬の開発が急務です。我々は、爪かく部の毛細血管内の血流速度の測定と毛細血管の形態学的変化を確認することで、皮膚硬化出現前の早期から強皮症患者を発見しうる方法を確立し、実際の診療に用いています。また、強皮症のモデルマウスを用いて、TGF-beta以外にも、B細胞、共刺激分子（ICOS）、サイトカイン（IL-17A）、接着分子（ICAM-1）などが皮膚の線維化に重要で、治療のターゲットとなる可能性があることを報告してまいりました。まだまだ病態解明と治療の確立には程遠い状況ですが、今回の受賞を励みに研究を続けていきたいと思います。今回の受賞に際しまして、関係者各位に厚く御礼申し上げます。また、日頃からご指導、ご助言をいただいております竹原教授、藤本准教授をはじめ、ご協力いただいております共同研究者や教室関係者各位に深謝いたします。十全医学会の先生方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻の程、よろしく御願い申し上げます。

平成二十三年度（第八回）金沢大学十全医学賞受賞

組織発達構築学
若山　友彦（平成六年卒業）

この度、栄誉ある第八回金沢大学十全医学賞を受賞させていただき大変光栄に存じます。受賞した研究テーマは、「造精細胞とセルトリ細胞の相互作用による精子形成の調節機構の研究」です。解剖学者として十年以上にわたり、この研究テーマに取り組んでまいりました。人体の中で次世代に遺伝情報を伝える精子を作り出す分子機構の解明は、生命の根幹に関わる命題であると考えています。研究内容を簡単に紹介させて頂きます。精子形成にはホルモンや局所因子が必要ですが、これらだけでは精子を作り出すことはできません。造精細胞とセルトリ細胞間の直接の相互作用が欠かせません。この分子機構は長年不明でしたが、細胞間の接着に着目し、新しい細胞接着分子を発見しました。この細胞接着分子は精子形成に必須の分子であり、造精細胞とセルトリ細胞間の直接の相互作用の分子機構の一部を明らかにできました。今後も精子形成の分子機構の全体像を探求していきたいと思います。特に、細胞接着分子の機能については自分の手で明らかにしたいと決意しています。今回の受賞に際し、関係各位の諸先生および研究の機会を与えていただきました井関尚一教授に心より深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後もご指導下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

第十六回国際動脈硬化学会学術会議 Educational Grant受賞

脳・肝インターフェースディシン研究センター
太田　嗣人（平成九年卒業）

平成二十四年三月二十八日、シドニーで行われた第十六回国際動脈硬化学会学術会議において、「CCR5 ablation prevents insulin resistance induced by high-fat feeding or leptin deficiency」と題してワークショップで講演を行い、Educational Grantを受賞しました。

グローバルに増加し続ける糖尿病患者の生命予後を左右するのは冠動脈疾患等の動脈硬化性疾患であり、その抑止は現代医学の重要課題と云えます。この様な代謝疾患と動脈硬化症の共通病態であるインスリン抵抗性の形成に慢性炎症が深く関与しています。最近十年の研究から、炎症とインスリン抵抗性を繋ぐ拠点としてマクロファージの重要性が示されています。私は、代謝臓器（脂肪、肝）において炎症細胞の浸潤・活性化の制御分子としてケモカインに着目し、新たにCCR5系が肥満による炎症とインスリン抵抗性の誘導・維持

に関わることを明らかにし今回報告しました。本研究は炎症を標的とした動脈硬化症や代謝疾患の治療薬開発という臨床応用に貢献すると評価されました。美しいダーリングハーバーを臨む学会場で、欧米・アジアの多くの研究者と議論を交わし、また、コロンビア大学時代の恩師Ginsberg教授とも再会し、意義深い学会となりました。本研究はフロンティアサイエンス機構および脳・肝インターフェースメディシン研究センターにて行われたものであり、本年のDiabetesに掲載されました。学内を中心に多くの先生方のご指導を賜りましたこと、また研究室メンバーに心より感謝いたします。

European Meeting on Hypertension and Cardiovascular Protection Travel Grant 受賞

恒常性制御学・附属病院救急部
村井　久純（平成十七年大学院修了）

この度、二〇一二年四月二十六～二十九日にロンドンで行われたヨーロッパ高血圧学会にて口述発表させていただきTravel grant を受賞いたしました。演題は〝Four weeks of high dose of simvastatin reduces sympathetic nerve activity of patients with primary hypertension〟で、これは、高コレステロール血症の治療薬として広く使用されているスタチンが、多面的効果の一つとして、交感神経活動を低下させるかどうかを検討した発表です。交感神経活動は、延髄の血管運動中枢が司令塔となり全身の交感神経調節を規定していますが、本態性高血圧患者においては、活性酸素やアンギオテンシンⅡの上昇が、刺激となり中枢の交感神経活動を上昇させることが知られています。本研究にて、ヒトにおける交感神経活動をマイクロニューログラフィー法により直接評価し、本態性高血圧患者においてスタチンによる交感神経抑制作用を証明しました。すべてのスタチンには、抗酸化作用がありますが、脂溶性であるシンバスタチンは、血液脳関門を通過することが可能で、直接、血管運動中枢に作用し、抗酸化作用を経由して全身の交感神経活動を低下させる可能性も示され、今回、受賞につながりました。

EuroSpine Annual Meeting EuroSpine 2012 Travel Grant 受賞

附属病院リハビリテーション部
加藤　仁志（平成十三年卒業）

平成二十四年五月二十八日から六月一日にかけてオランダ、アムステルダムで開催されたEuroSpine Annual Meetingにおいて、EuroSpine 2012 Travel Grantを受賞しました。本学会での発表内容は『How much can preoperative embolization decrease blood loss during palliative surgery for spinal metastasis?』ならびに『The effect of spinal shortening after total en bloc spondylectomy –A biomechanical study in the thoracic spine-』であり、ともに口演発表でした。放射線科の南哲弥先生にご協力頂いた脊椎腫瘍術前に行われる血管塞栓術の効果に関する臨床研究と、アメリカ留学時に行った屍体骨を用いた腫瘍脊椎骨全摘術における脊柱短縮効果を示したバイオメカ研究です。

今回はSPINEWEEKと題した学会で、EuroSpine（ヨーロッパ脊椎学会）だけでなく、国際腰椎学会や側弯症学会など計七つの脊椎学会が一同に会す四年に一度のcombined meetingであり、世界で最も大きな脊椎外科学会でした。世界各国から大勢の脊椎外科医が参加して活発な議論が行われ、金沢大学からは十題の口演発表と二題のポスター発表があり、学会は大変盛り上がりました。そんな中、ヨーロッパ脊椎学会のセクションで発表する若手医師の中で私を含む五名に当学会賞が贈られ、学会参加費の免除と渡航費の一部が贈呈されました。期間中の学会新聞にも一面写真つきで受賞が紹介され大変感激しました。今後も脊椎腫瘍の治療をはじめとした、金沢大学発のオリジナリティーのある内容の学会発表や科学論文を数多く輩出できるよう精進いたします。最後に、本研究に関してご指導頂きました土屋弘行教授と村上英樹准教授に心より御礼申し上げます。

第七十一回日本医学放射線学会総会 プラチナメダル賞受賞

経血管診療学
北尾　梓（平成十四年卒業）

平成二十四年四月、第七十一回日本医学放射線学会総会にてプラチナメダル賞を受賞しました。電子ポスター部門の最優秀発表に送られる賞を頂き、大変光栄に思います。

発表テーマは「肝細胞癌のGd-EOB-DTPA造影ＭＲＩ：信号強度と腫瘍マーカー産生との相関」です。Gd-EOB-DTPAは肝細胞膜に発現するトランスポーターにより肝細胞に取り込まれ、胆汁中に排泄される特殊なＭＲＩ造影剤です。通常の肝細胞癌は造影剤の取り込みが低下し肝細胞相で低信号を呈しますが、一部に取り込みが亢進し高信号を呈する病変が存在します。今回の検討により、高信号肝細胞癌はAFP・PIVKA-IIの発現が減少しており、予後良好な一群であることが示されました。画像でこのような肝細胞癌のsubtypeを推定することは、今後の個別化診療にも有用であると考えられます。なおこの発表内容はRadiology誌に掲載予定であり、一読頂ければ幸いです。ご指導頂きました放射線科　松井　修教授、消化器内科　金子周一教授、病理学教室　中沼安二教授ならびにご協力頂きました多くの方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今回の学会では技術学会を含め、当院から多数の受賞者が出ました。優秀な同僚の存在は私にとっても誇りであり、今後も共に診療に役立つ研究に取り組んでいきたいと考えております。

第十回　高安賞

高安賞は平成十五年度、本学昭和三十九年卒業の臼井溢先生のご篤志により設けられた賞で、優秀な学位論文を発表した博士課程修了者に贈られる。選考は、第一次審査会（主査および副査）と専攻長等から構成される選考委員会の二段階で行われ、医学博士課程運営委員会と博士課程委員会の議を経て決定される。

平成二十四年度受賞者には次の四名が選ばれた。

最優秀論文賞　栂（とが）　暁子（あきこ）　血管発生発達病態学（小児科学）〝Clinical significance of cloned expansion and CD5 down-regulation in Epstein-Barr virus (EBV)-infected CD8+ T lymphocytes in EBV-associated hemophagocytic lymphohistiocytosis〟（Epstein-Barrウイルス(EBV)関連血球貪食性リンパ組織球症におけるＥＢＶ感染ＣＤ８陽性Ｔ細胞のクローン性増殖とＣＤ５発現低下の臨床的意義）The Journal of Infectious Diseases 二〇一〇年六月掲載

優秀論文賞　島（しま）　啓介（けいすけ）　脳老化・神経病態学（神経内科学）〝Posterior cingulate atrophy and metabolic decline in early stage Alzheimer's disease〟（早期アルツハイマー病における後部帯状回萎縮と代謝低下）Neurobiology of Aging 二〇一一年掲載

優秀論文賞　孔（こう）　丹（たん）　がん幹細胞学（腫瘍遺伝学）〝Inflammation-induced repression of tumor suppressor miR-7 in gastric tumor cells〟（胃腫瘍細胞における炎症反応依存的ながん抑制性microRNA-7の制御）Oncogene 二〇一一年掲載

優秀論文賞　岡田（おかだ）　亮（りょう）　生体防御応答学（薬学部）Apoptosis-dependent externalization and involvement in apoptotic cell clearance of DmCaBP1, an endoplasmic reticulum protein of *Drosophila*（ショウジョウバエの小胞体タンパク質DmCaBP1のアポトーシスに依存した細胞外放出とアポトーシス細胞貪食への関与）The Journal of Biological Chemistry 二〇一一年一月掲載

平成二十四年七月七日（土）開催の金沢大学医学部十全同窓会総会で中村裕之副医学系長から四名の受賞者に賞状と記念盾および副賞賞金が授与された。

なお、本年十一月十日（土）午後一時、高安賞創設十周年・臼井国際奨学金創設五周年記念シンポジウムが医学類Ｇ棟で開催される予定である。（山本　博　記）

第八回　黒川良安賞およびスロイス賞

医王保護者の会の支援に基づき、医学類の成績優秀学生を顕彰する黒川良安賞およびスロイス賞の授賞式は、今年八回目を迎えた。

黒川良安賞は、卒業する学生のうちから選ばれた山口順子さん、西谷雅樹さん、北椎奈さんの三名に対して、平成二十四年三月二十二日の学位記伝達式の席上で授与された。

またスロイス賞は、三年次を修了した学生のうちから選ばれた大嶋芳美さん、大島由さん、中村奈都紀さんの三名に対して、平成二十四年五月二十六日に開催された、医王保護者の会総会の席上で授与された。

（山本　健　記）

学会報告等

これからの肝臓学 ～継承と創造～ 第四十八回日本肝臓学会総会

第四十八回日本肝臓学会総会は金子周一教授を大会会長として、平成二十四年六月七日（木）、八日（金）の二日間、石川県立音楽堂、ホテル日航金沢、ＡＮＡクラウンプラザホテル金沢などを会場として開催されました。十四年ぶりに金沢で開催された今回の総会は、「これからの肝臓学　～継承と創造～」をテーマとして企画いたしました。二千九百名を超える医療従事者の方々にご参加いただき、過去最多の千九十六演題の応募演題を通して、肝臓学の体系を学び継承するとともに、新たな医学と医療を創造する場になったのではないかと思います。

プログラムには、現在の肝臓学のうち最も克服すべき疾患として注目されている「Ｂ型慢性肝炎」「Ｃ型慢性肝炎」「肝細胞癌」をシンポジウムとして取り上げました。九十分のコンパクトなシンポジウムでしたが、それぞれの分野を代表する先生方にトピックスを体系立ててご講演いただき、とても聞き応えのあるシンポジウムとなりました。また二十六のテーマに分かれてパネルディスカッションならびにワークショップが開催され、会員がそれぞれの知見を持ち寄り、活発なディスカッションが行われました。

最近演題数が増加したためにセッションが並列し重要な発表に立ち会えなくなった、あるいは肝臓学の広がりとともに知りたい分野でも十分に理解できないという発表もあります。そこで今回の総会では、各分野で活躍しておられる先生にお願いし、発表時間と異なった時間にサマリーセッションを設け、演題の〝まとめ〟をしていただきました。担当の先生にはご苦労をおかけしましたが、参加者の広く深い理解につながり、好評を博しました。今後の学会運営のひとつの方向性を示したのではないかと思います。

特別講演としてノーベル賞受賞者の益川敏英先生（京都大学名誉教授、名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構）、招請講演には文化功労者の松原謙一先生（大阪大学名誉教授）にご講演いただきました。益川先生は「現代社会と科学」と題し、高度に発達した現代科学にどう相対すべきかを説かれ、「統一感ある学問の全体像を見失わないよう常に努めることが大事だ」と強調されました。また松原先生には「ＲＮＡチェック　～免疫機構の検査による病気の診断について～」と題してご講演いただき、新しい医療の形を見せていただきました。この二つの講演は一般市民にも開放され、満席となりました会場で最高峰の科学者の学問する心を感じていただけたものと思います。

学会期間中は天候にも恵まれたこともあり、学会の前後には金沢の街も堪能していただけたのではと想像しております。最後にご支援を賜りました十全同窓会にこの場を借りて深謝いたします。

（総会事務局　荒井　邦明　記）

第二十二回日本心臓核医学会総会・学術大会

第二十二回日本心臓核医学会総会・学術大会は二〇一二年六月二十二日―二十三日に金沢市文化ホールにおいて開催されました。主テーマは「リスクに基づく診断治療戦略」であり、冠動脈疾患リスクの推定からいかに最適の診断治療に結びつけるかという観点で企画されました。心臓核医学の検査数は、米国では九十年代半ばから急速な増加が見られ虚血診断の標準とされていますが、日本では冠動脈造影や血行再建術の総数に比してその比率は比較的低い現状があります。しかしながら心筋虚血の証明をガイドとした治療方針決定が患者の予後改善に結びつくという認識は徐々に増加しています。本大会もこのような背景の中で、核医学が果たすべき役割を考える機会となりました。

特別講演では「トランスレーショナルリサーチと分子イメージング」と題する樋口隆弘教授（金沢大学大学院・核医学の出身で現在ドイツのWuerzburg大学）の講演が行われました。分子イメージングはとりわけ基礎研究による病態解明に主眼がおかれていますが、臨床への展開を視野に入れて基礎と臨床との橋渡しをするという考え方が、トランスレーショナルリサーチの根底にあり、新しい心臓分子イメージング手法や進歩について講演がされました。初日のイブニングセミナーでは、小倉記念病院循環器科の横井宏佳先生の「DES時代の心臓核医学：予後改善を目指したPCIへの取り組み」と題する講演と、金沢大学大学院・脂質研究講座の馬渕宏特任教授による遺伝性脂質異常症の歴史と展開に関する講演が行われました。

シンポジウムでは「心臓核医学の定量解析と臨床へのインパクト」、「慢性虚血性心疾患におけるリスク評価の意義とその戦略」が討論されました。検査前リスクをどのように考えるのか、さらに低リスク、中リスク、高リスクのそれぞれの患者におけるイメージングを含めた診断治療戦略という観点から総合的議論がなされました。カテーテル治療の前に不可欠な心筋虚血の証明は、冠血流予備能（FFR）の測定が患者の予後を改善するという知見からも支持されますが、特に多枝病変や治療の修飾が加わった複雑病変において、インターベンション施行に根拠を与えるものとなります。一方では、侵襲的治療が不要の症例を識別する上でも役割があるものと考えられます。また、心臓核医学技術の面でも、技術的標準化と、技師の読影能力の必要性に関する二つのシンポジウムが行われました。

一般演題も含めて好評のうちに会を終えることができました。ご支援を頂きました循環器系、核医学及び放射線系、そして同窓会の諸先生に厚く御礼申し上げます。

（大会会長　中嶋　憲一　記）

第四十八回日本肝癌研究会―個別化と集学治療―

平成二十四年七月二十日（金）、二十一日（土）の二日間、石川県立音楽堂、ANAクラウンプラザホテル金沢において、第四十八回日本肝癌研究会（会長　松井修教授）が開催されました。先月の第四十八回日本肝臓学会総会（会長金子周一先生）に引き続き、金沢は肝臓学イヤーとなりました。消化器内科医・消化器外科医・放射線科医・病理医を中心に、研修医やコメディカルスタッフの参加も含め千二百名を超える出席者がありました。

肝癌の診療は新たなMRI造影剤の登場による早期肝癌の診断能の向上や分子標的治療薬の登場で新しい展開をみせており、さらに遺伝子学的あるいは分子病理学的解析が進展しています。肝癌の診断や悪性度診断・治療効果予測などにおける肝癌の個別化を様々な方法で検討し、これらに基づいて集学治療を行うという大きな流れが生まれつつあることを踏まえ、「個別化と集学治療」をメインコンセプトに掲げて企画を創案しました。

基調教育シンポジウム「肝癌の分子病理学的個別化診断の現状と将来の展望」は金子周一先生（金沢大）に座長をお願いし、肝細胞癌の統合的ゲノム解析、肝細胞癌分子分類、肝癌の分子病理診断、切除標本を用いたバイオマーカー・分子標的の探索について、最先端の肝細胞癌の細分化・多様性をそれぞれのトップランナーの先生方にお示し頂きました。さらにワークショップ「肝癌のバイオマーカー（分子・血液・画像）による悪性度診断・治療効果判定」では工藤正俊先生（近畿大）と高安賢一先生（国立がん研究センター）にお願いし、種々のバイオマーカーによる最先端の悪性度診断、治療予測、効果判定について内科医、外科医、放射線科医八名により論じられました。

会長の松井修先生からは会長講演「肝細胞癌多段階発癌の画像診断と肝動脈塞栓療法：過去・現在・未来」を頂きました。画像診断においては近年EOB-MRIの登場により遺伝子レベルでの肝細胞癌subtypeが臨床画像で同定できるようになり、肝癌分子イメージングの新たな幕開けを感じました。肝動脈塞栓療法はカテーテルなどのデバイスの進歩により一九八〇年代後半の亜区域塞栓術から超選択的塞栓術へと進化し、塞栓物質は球状塞栓物質の臨床投入を控え、さらなる局所治療効果の改善が期待できる話でした。

教育講演では放射線科色を前面に打ち出し「肝画像診断手技 state of arts」、「肝画像診断 state of arts 画像と病理」、「肝癌経皮的治療手技 state of arts」を企画し、各々第一線で診療にたずさわっておられるエキスパートから講演を賜りました。

最後になりましたが、今回の研究会の開催に当たり、金沢大学放射線科同門会、金沢大学十全同窓会を始め、多くの方々にご支援を頂きました。深謝致します。

（事務局　小坂　一斗　記）

第二十二回体力・栄養・免疫学会大会

平成二十四年八月二十四日（金）～二十六日（日）の三日間、能登・志賀の郷温泉「いこいの村能登半島」において、第二十二回体力・栄養・免疫学会大会を開催させていただきました。本大会には、公衆衛生学、予防医学、疫学、運動、栄養、免疫、メンタルヘルス領域の医師、保健師、看護師、行政関係者、あるいは臨床、基礎部門の研究者など、全国から百名以上参加していただきました。

大会開催地である志賀町は、二〇一一年に「世界農業遺産」に認定された「能登の里山里海」の中心であり、自然環境が多様で、動植物だけでなくヒトに対しても極めて健康的であることから、私たちの研究活動の一貫として「志賀町健康づくり事業」を展開しております。その関係から、志賀町で本大会を開催させていただきました。大会参加者に「能登の里山里海」をより知っていただくために、金沢大学環日本海域環境研究センターの中村浩二教授に「世界農業遺産「能登の里山里海」：自然と文化を活かした地域づくり」と題して特別講演を行っていただきました。座長は、宇野文夫特任教授（金沢大学地域連携推進センター）にお願い致しました。

本大会では、昨今における医療事情において超高齢化による医療費の膨大な高騰と過疎化による医療崩壊の危機に対応するために、副題を「予防医学を実践するために」とし、予防医学の必要性に力点をおいた健康づくりについて活発な討論を行いました。シンポジウム一「予防医学の新たな展開～基礎と臨床の有機的連携～」では、荻野景規教授（岡山大学医歯薬学総合研究科公衆衛生学）に座長をお願いし、中路重之教授（弘前大学医学研究科社会医学講座）、本間達也先生（医療法人生愛会）、稲川利光先生（ＮＴＴ東日本関東病院リハビリテーション科）にご講演いただき、私たちの志賀町における研究についても紹介させていただきました。シンポジウム二「食品と健康」では、市村宏教授（金沢大学医薬保健研究域医学系ウイルス感染症制御学）に座長をお願いし、野本康二先生（株式会社ヤクルト本社中央研究所）、内山成人先生（大塚製薬株式会社佐賀栄養製品研究所）、鈴木信孝特任教授（金沢大学医薬保健学総合研究科臨床研究開発補完代替医療学）、弘田量二助教（高知大学教育研究部医療学系連携医学部門）にご講演いただきました。一般講演では、三十九題の発表がありました。

最後に、本大会にご支援いただきました金沢大学十全医学会及び十全同窓会、共催していただきました石川県医師会と羽咋郡市医師会、協賛していただいた志賀町や多くの医療福祉関連施設や企業、関係各位に心より御礼申しあげます。

（中村　裕之　記）

第六十三回　国立大学法人病院病理部会議

平成二十四年六月二十二日に、金沢大学を当番大学として、ＫＫＲホテル金沢で第六十三回国立大学法人病院病理部会議が開催されました。本会議は毎年、全国国立大学病理部の部長、副部長が集まり、文部科学省からの講師をお招きして、大学病院病理部の現状、問題提起、その対策などを議論し、病理部運営を円滑に行うことを目的としています。

今回は三十九国立大学から総勢五十五人が参加しました。金沢大学附属病院中沼安二病理部長による開会宣言で始まり、次いで金沢大学附属病院　富田勝郎病院長の挨拶、そして、中沼安二病理部長および本会議議長の東京大学医学部附属病院　深山正久病理部長により、会議が進行されました。

文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室　竹本浩伸病院第一係長からは「大学病院を取り巻く諸課題」として、国立大学改革プラン、医学教育の改善・充実の方向性、研究医養成、がんプロフェッショナル養成基盤推進プランなどについて講演がありました。

特別講演として、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科　吉野正病理部長から、「Advanced Research Training (ART) プログラムによるシームレスな医学研究人材の育成・学部・卒後臨床研修をつなぐ早期大学院教育」と題して、岡山大学での人材育成システムやその工夫について、講演していただきました。卒後臨床研修の必修化により、大学院教育・研究制度の崩壊が危惧される中、各大学から現状や対策などの活発な意見交換がありました。

協議事項として、「研究者育成における大学附属病院病理部が果たす役割の重要性」「病理検体保管状況」についてのアンケート調査結果の報告が行われました。他に、ワーキンググループで討議された「国立大学法人病院病理部会議の将来像に関する提言」、「病理診断科標榜」、滋賀医科大学　岡部英俊病理部長からの「病理部の担当業務に関する検討課題」が協議されました。最後に全国大学病院病理部技術者連絡会会長　熊本大学徳永主任技師より連絡会で議決された認定病理検査技師制度の導入や細胞検査士の国家資格への変更などについて要望がありました。

会議終了後の懇親会では情報交換が行われ、有意義な時間となりました。

今回、国立大学法人病院病理部会議を無事に終えることが出来ましたのも、十全同窓会の会員の皆様方の日頃のご支援の賜物と感謝しております。心より、御礼を申し上げます。

（池田　博子　記）

金沢大学 関連病院長会議

金沢大学関連病院長会議は平成二十四年七月十四日（土）、例年通り金大病院の宝ホールで開かれました。北陸三県や関東・関西から各金大関連病院長が集い、金大病院からは病院長(富田)はじめ、医学系長（山本博）医学類長(山本健)、保健学系長(大竹)、各副病院長、全診療科の教授、医局長が出席し（計約百人余）意見交換と懇親を深めました。まず山田会長（石川県立中央病院長）から「今年百五十周年を迎えた金沢大学の長い歴史を尊重しつつ、金大病院と関連病院の連携を一層深めたい」との挨拶で総会が始まり、麻野井議長（射水市民病院長）のもと平成二十三年度事業及び収支報告、平成二十四年度事業計画案及び予算案が承認されました。

総会後の意見交換会では、小生が金大病院長として挨拶させていただき、「関連病院からの医師要求が依然として最も強いが、その一番のポイントは研修医の確保です。病院長四期目の今、七年前の就任当時を振り返ると、初期研修制度スタート時の研修医二〇～三〇人のどん底時代から這い上がって今年九〇人前後にまで確保できるようになったのは、関連病院と一体になって研修医確保に向けて努力してきた賜物です・・・」と、経緯と感謝を述べたうえで、「しかし来年度は北陸出身の金大医卒業生の割合が前年比で十五％ほど少なくなり、専門コースの研修希望者も少ないことから、研修医確保は極めて厳しくなるだろう」との分析を述べ、いっそう協力態勢が必要であることを述べさせていただきました。引き続き太田副病院長から、来春開設予定の「金大病院ＣＰＤ センター」について概要を紹介していただき、「医療人としての専門能力の向上と生涯教育の充実を図る目的で、県行政の支援のもと、金大病院が主体となって運営していくことになりますが、関連病院の皆さんにも大きなメリットとなるよう広く門戸を開いていきたい」と説明していただきました。

続いて、各県ブロック会議からの意見や、新任病院長、金大新任教授からのメッセージを頂き、他に研修医の育成や勤務医の高齢化に対する要望、非常勤医師の損害保険の利用などについても情報交換しましたが、とりわけこの会の成長を感じたのは、「大学病院に一方的に要望するばかりでなく、我々関連病院として大学病院に何ができるか、をもっと考えよう」という一言が出たことでした。

（富田　勝郎　記）

御遺骨返還式・合同慰霊祭

平成二十四年度の御遺骨返還式・合同慰霊祭は六月十六日（土）午前十時、十全講堂での文部科学大臣感謝状伝達式から始まりました。中越米雄総務課長による開式の辞に引き続き、平成二十三年度の献体者のご芳名が拝誦され、山本健医学類長よりご遺族おひとりおひとりに文部科学大臣感謝状が伝達され、感謝の言葉がご家族の皆様に述べられました。

献体者御遺骨返還式は午前十時半から、ご遺族の皆様、しらゆり会会長　井沢義武様、理事長　竹山雅万様をはじめとしたしらゆり会役員の方々、会員の皆様にご出席いただき、山本健医学類長、医学系研究科・医学類・附属病院の教職員、そして学生が出席して始まりました。名誉会員二十八名のご冥福を祈って黙祷をささげた後、祭主の山本健医学類長が追悼の言葉を述べられました。出席者全員が壇上のご遺骨に感謝の気持ちをこめて献花をし、山本健医学類長からご遺骨がご遺族に返還されました。最後に学生を代表して小川宜彦君(三年生代表)が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当者を代表して機能解剖学分野尾崎紀之がお礼の言葉を申し述べました。

合同慰霊祭卯辰山墓地法要は午後一時から金沢大学医学部卯辰山墓地において、覚林寺ご住職のご読経とご講話を賜り、粛然と営まれました。ご遺族としらゆり会の皆様のご臨席を仰ぎ、山本健医学類長、教職員と学生が参列し焼香、参拝しました。この墓地には、明治二十年の第四高等中学校医学部から現在に至るまでの、約六千名の献体者の芳名墓碑が三十四あり、井沢義武しらゆり会会長のご尽力もあり、金沢市よりその整備についてご配慮をいただいています。

第百十回合同慰霊祭は午後二時半に始まりました。祭壇には正常解剖と病理解剖に御体を捧げられた百五十三名のご芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族とご来賓、しらゆり会役員ならびに会員の皆様のご臨席を仰ぎ、山本健医学類長、絹谷清剛附属病院副病院長、医学系研究科・医学類・附属病院の教職員、そして学生が参列しました。黙祷の後、山本健医学類長が追悼の言葉を述べられ、出席者全員が献花をしました。最後に絹谷清剛副病院長が謝辞を述べられ、午後三時半過ぎに終了となりました。

七月十一日（水）、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者盂蘭盆会法要が営まれました。しらゆり会会長　井沢義武様、しらゆり会役員の方々のご出席を仰ぎ、山本健医学類長をはじめとする医学類の教職員多数の方々が参列されました。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者のご冥福を祈りました。墓地法要終了後、十全同窓会が平成十四年十月に修造して下さったホルトルマン（金沢医学所教師）愛児（明治十二年歿）の墓碑にも奉拝しました。

（尾崎　紀之　記）

病院紹介

金沢市立病院

病院概要

金沢市立病院の沿革は、明治三十三年三月に金沢市伝染隔離所を桃畠町に設置し、明治三十五年に金沢市立桜木病院と改めました。本年で設立百十二年となります。その後、昭和三年に内科、外科を中心とした金沢市立金沢病院（昭和二十五年に金沢市民病院に改称）、昭和二十三年に金沢市産院を新設しました。昭和三十四年八月金沢市民病院を総合病院金沢市立病院に改称し、平和町三丁目の現在地に移転しました。平成元年に現在の金沢市立病院の建設工事が完了（一般病床二百八十床、結核病床四十床、感染症病床四十床の計三百六十床）しました。また、平成十一年に東館（健康管理センター、透析センター、内視鏡センターほか）の増築を行いました。その後、結核病床、感染症病床の削減を行い、現在病床数三百十一床（一般病床二百八十床、結核病床二十五床、二類感染症病床六床）となっています。

金沢市立病院は、金沢市の自治体病院として、市民の生命と健康を守るため、地域のニーズを反映し市民に信頼される質の高い病院を目指しています。診療科については、一時小児科、産科が休診となりましたが、金沢大学のご指導により再開することができ、現在二十診療科により運営されています。また、診療科間の連携、チーム医療の推進の観点からセンターを行っており、現在、メタボリックシンドロームセンター、呼吸器・睡眠センター、脳センター、消化器センターを設置しました。

全員参加型の医療の推進と経営改善

本院では、意思決定の迅速化と全職員の病院運営への参加を推進するため、意思決定機関を管理会議、科長会議のみとし、職員への意思決定周知のため全員参加型の運営会議および議事録の公開を行っています。また、院長の諮問会議として中堅職員を中心とした経営企画会議、若手職員を中心とした広報・環境チームを設置しています。

金沢市立病院では、平成十八年まで八年間経常収支の赤字が続き、平成十八年度に金沢市立病院経営改善会議（金子周一委員長）が設置されました。平成十九年度より金沢市立病院経営改善会議からの答申および実施行程表の提言を受け、病院の医療の質の改善、経営の効率化を行ってきました。平成二十三年度はその最終年度であり、外部評価委員会にこの間の外部評価を実施していただきました。外部評価の結果では、基本計画目標項目百二十四項目中、達成九十一項目（七十三・四％）、概ね達成十三項目（一〇・五％）と達成率は八十三・九％でした。経常収支は五年のうち四年間は黒字となり、入院延べ患者数は約一・三万人増加、平均在院日数は二・五日短縮、救急入院患者数は一・六倍の増加、診療材料費は約一〇％減少と経営改善効果がみられました。診療面では、医師五名の増員、センターの設置、電子カルテ・DPCの導入、管理型初期臨床研修病院への参加、七対一看護基準の取得、ホスピタリティー・アートの展開等多くの改善が行われました。しかし、この五年間で病院としての基本的部分はかなり整備されましたが、金沢市の自治体病院としての特色はまだまだ不十分な状態であり、今後も引き続き改革を行う必要があります。

安全・安心・味わいの医療：住民参加型の医療を目指して

そこで今回、金沢市立病院運営諮問会議とご相談し、平成二十四年度からの新中期計画を作成しました。病院のビジョンとして、〝地域の皆さんとともにつくる安全・安心・味わいの医療〟としました。基本方針としては、一、住民参加型の医療、二、公益性・公共性の堅持、三、救急医療、先進医療、チーム医療等の病院機能の強化、四、病院マネジメント・経営企画力の強化と効率的・即応性のある経営形態の構築、五、職員の教育、研修、研究機能の強化、六、安らぎの空間の提供と地域貢献をあげました。

現在、ホスピタリティー・アートプロジェクト、健康増進・地域貢献プロジェクト、臨床研究プロジェクトを設置し種々の取り組みを行っています。ホスピタリティー・アートプロジェクトでは、金沢美術工芸大学との連携により安らぎの空間づくりを行っており（写真）、最近では水回りの整備を行い、障害者向けのモデルを提供する予定です。健康増進・地域貢献プロジェクトでは、出前講座や学校での手洗い教室を行い、本年八月にはホスピタルギャラリーを開催しました。臨床研究プロジェクトでは、医療開発室を設置し、教育研修室を整備するとともに、医療統計などのソフトをいれたIT機器を整備しました。また、初期臨床研修プログラムには臨床疫学研究を選択科目として加えております。また、科学研究費などの競争的資金の獲得にも積極的に取り組み、平成二十三・二十四年度は二件採用されました。今後は、開発型医療や奨学金制度への取り組みを行う予定です。

（院長　高田　重男　記）

写真：待ち時間を豊かにする椅子

病院紹介

市立敦賀病院

当院は明治十五年二月に県立敦賀病院として設立されました。明治二十四年四月に郡立敦賀病院に改称され、昭和三十年一月には町村合併により市立敦賀病院に改称され、現在に至る約百三十年の歴史を有する病院です。昭和三十八年には一般病床百七十二床、伝染病床二十五床、結核病床四〇床、計二百三十七床でしたが、その後、疾病構造の変化に対応し診療科の増設や数回の増改築工事を経て、平成十一年四月には一般病床三百四十八床、感染症病床二床、計三百五十床となりました。しかし、その後の医師不足により、現在は一般病床三百三十床、感染症病床二床、計三百三十二床となっています。

福井県は嶺北と嶺南地域に分けられますが、当院があるのは嶺南地域です。二次医療圏でもある嶺南医療圏は二州と若狭の二つの地域に分けられます。当院は二州地域の唯一の基幹病院であり、地域内の救急車の七割以上が当院に搬送され、搬送台数は年間に千八百台を超えます。二次救急指定病院ですが、三次救急指定病院が近くにはないため、重篤な患者さんはほとんど全てが当院に搬送されます。二州地域の人口はおよそ八万七千人であり、人口十万人あたりの医師数は一八六・四人と福井県平均二三八・三人をかなり下回っています（平成二十二年度統計）。例えば、お産を取り扱う産科医師は当院の二名を含め三名だけであり、全国平均、福井県平均の一／三程度で、医師の高齢化により数年後には二州地域ではお産ができない危機が想定されます。また、一般病床数は六百九十三床で、一〇万人あたり七九七・二床（福井県平均八二三・八床）で決して少なくはないのですが、療養病床は二百三床、一〇万人あたり二三三・五床（福井県平均三〇〇・四床）と明らかに不足しています。介護療養型医療施設も六十ベッドしかなく、退院可能な患者さんの後方ベッド不足に悩まされています。看護師不足も深刻で、七対一看護体制はとれない現状です。医療過疎地域と言っても過言ではありません。

研修医制度の発足などの理由により、四十七名いた当院の常勤医は平成十七年度には三十九名まで減少し、それに伴い経営状態も悪化しました。その後、金沢大学、福井大学各医局のご好意により医師も徐々に増加し、現在の常勤医師数は研修医九名を除くと四十六名まで戻っています。数年前から経営状況も好転しており、職員の努力のたまものと感謝しています。常勤医の内訳は金沢大学二十八名、福井大学十六名、その他二名と、金沢大学が六割以上を占めています。また、研修医の一名も金沢大学とのタスキがけです。金沢大学の関連病院としては最も遠方の病院の一つですが、医局より医師を派遣していただいており、なんとか地域医療を支えています。しかし、神経内科、血液内科、精神科の常勤医師はおらず、金沢大学、福井大学の医師に外来診察をしていただいております。

福井県嶺南地域は原子力発電所が十四基あり、全国で最も多い地域です。当院は、災害時医療地域災害医療センターで、初期被ばく医療機関でもありますので、平成二十三年二月にDMATを立ち上げ、東日本大震災に六班の支援を行いました。福井大学寺澤秀一教授（昭和五十一年金沢大学卒業）の企画された「緊急被ばく医療に強い救急総合医養成コース」事業（科学技術戦略推進費）が始まっており、平成二十三年十月には救急科を立ち上げることができました。救急科医師は当院職員や市民に対して被ばくに対する正しい知識の啓蒙を行いつつ、現在も福島県の原子力発電所の医務室に派遣され、発電所の復旧作業を行っている数千人の作業員の健康管理も行っています。

当院は基幹型臨床研修指定病院であり、ここ数年は毎年四、五名の研修医が新たに勤務され、活気があふれています。最近では、当院で初期研修をした地元出身医師が金沢大学に入局し始め、大変喜んでいます。

当院のモットーは「地診地療」（地元の患者さんは、地元で診察し、地元で治療する地域完結型医療）です。また、国は二〇二五年を目標に、急性期入院医療から在宅医療に方向変換を目指しています。これらをふまえ、少ない医療資源のなかで、いかに病診連携、病病連携を進めていくかが当院の課題と考えています。引き続き、金沢大学や十全同窓会の皆様のご指導、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

（院長　米島　學　記）

教室だより

分子遺伝学

［教室の沿革］

当教室の歴史は、一九一二年、金沢医学専門学校時代に「医化学」が正式に学科目として追加されたことに始まります。須藤憲三初代教授が鋭意医化学教室の創建にあたられ、その後、岩崎憲教授、高木康敬教授、米山良昌教授と引き継がれ、一九六三年、第二講座の新設にともない金沢大学医学部生化学第一講座と改称されました。

一九八八年からは福田龍二教授の主宰となり、二〇〇一年講座名は金沢大学大学院医学系研究科・脳医科学専攻・脳細胞分子学講座・情報伝達・遺伝学研究分野となりました。二〇〇七年に主任教授が村松正道に交替するに伴い、分野名を分子遺伝学研究分野と改名しました。今年は発足より百周年にあたります。

［教育］

医学博士課程：初期総合カリキュラムのうち、「基礎系教育セミナー」および「最新医科学英語」の講義を分担しています。研究分野開設科目として、博士論文の研究指導のほか、隔週一回、約一時間半の抄読会を行っています。内容は分子生物学、ウイルス学、および免疫学の最新の英文論文を英語で紹介するものです。また、研究者・院生各自が最近の研究成果を英語で報告しディスカッションするミーティングを毎週二時間程度行っています。

医学修士課程：「生命倫理学」の講義を一年に一回分担しています。

医学類：「生体分子と細胞の機能」（講義）二学年通年。「生体分子と細胞の機能」（実習）を血管分子生物学と分担しています。三学年冬学期の「基本的基礎配属」を担当し、六年次前期の「応用基礎配属」を分担しています。またMRTプログラムにも参加しています。

［研究の紹介］

私たちの研究室は、免疫系とウイルスの相互作用を分子生物学・免疫学的アプローチで解析しています。ウイルス感染の病態を解析し、そこで得た基礎的知見を臨床研究者に紹介し、基礎医学者として医学に貢献したいと考えています。

遺伝子に点突然変異を誘導する酵素Activation-induced cytidine deaminase（AID）を中心に研究を展開しています。これまでにAIDが抗体遺伝子の機能増強に必須である事、AID活性の制御不良が発ガンを起こす事を示してきました。現在モデルとして使用しているウイルス実験系は、B型肝炎ウイルス（HBV）とパピローマウイルス16（HPV16）です。分子生物学を駆使して、培養細胞実験系、マウス実験系、臨床検体の解析を行い、HBVやHPV16が起こすウイルス発ガン病態にAIDあるいはその類似酵素が関与している可能性を追求しています。また薬剤耐性ウイルスやワクチンの効果をかいくぐる変異型ウイルスがAIDの変異導入活性で説明できるかも検討しています。

HBVとHPVどちらも人の発ガンウイルスとして知名度が高いウイルスで、アジア人のかなりの人口はこのウイルスに感染しています。現在の状態がずっと続くとすれば、今後これらのウイルスが起こすであろうガンにより、多くの命が奪われるといわれています。（例えば中国では〇・九億人がHBVキャリアーといわれています。）私達は、現在のウイルス発ガン機構の理解に新しいコンセプトを提案すべく、日々研究に励んでいます。

［おわりに］

現在、村松教授の元に、准教授一名、助教二名、研究員一名、スタッフ四名の体制にて研究を行っています。

博士課程大学院生四名（いずれも外国人留学生）が学位取得を目指して熱心に研究しており、医学部生も参加して、にぎやかになってきました。今後も学生の数は増える見込みで、益々活気ある教室になっていくことと思われます。

今後とも同窓会員の皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（村松　正道　記）

平成二十四年十全同窓会名簿刊行いよいよ間近!!

編集委員会では、各卒業年度からの調査担当者の協力を中心とし、複数の方に住所変更の校正作業をお願いし、遺漏のないように努力しています。何分多数、多岐に亘る作業ですので御協力の程宜しくお願い致します。「名簿掲載事項確認届」のご提出がまだの方は**最終締め切り十月三十一日（水）到着分**までが今回の名簿改訂作業に反映されます。今一度ご確認くださいますようよろしくお願い申し上げます。

web上での変更も可能です。

URL:http://www.m.kanazawa-u.ac.jp/jyuzen.html

なお、改訂版の発送は十二月初旬を予定致しております。

十全同窓会員名簿編集委員長
加藤　聖

免除会員の先生方へのお願い

名簿改訂事業は、協賛企業（製薬・医科器械・出版社他）の広告収入の減を受けて資金的に厳しい状況にあります。

誠に恐縮ではございますが、一部五千円でのご購入をお願い申し上げます。名簿発送時にお振込用紙を同封させていただきますので、ご理解とご協力を賜わりますようよろしくお願い申し上げます。

教室だより

恒常性制御学

沿革：教室は明治十六年の内科学教室開設を起源として今年で創設百三十年を迎えました。二〇〇四年に第十八代となる金子周一教授が着任し、教室名を環境医科学専攻の「恒常性制御学」に変更しました。人体は飢餓を含めた外界の環境変化に対応して体内の環境を恒常的に維持する仕組み（ホメオスターシス）を持っています。しかし、近年の生活環境の変化は人類の進化の速度を超えています。それどころか栄養を維持しようとする恒常性の維持機構そのものが、癌、糖尿病、高血圧、脂質異常症や心血管系障害といった生活習慣病の背景にあると考えられています。そこで、教室では二十一世紀疾病の共通病態となる生体恒常性維持機構の解明と制御を目指して研究と臨床をすすめています。いつの時代も、医師になって早い時期に、直面する課題の本質をとらえて最新の研究と臨床を活発に行うことが、教室を離れて何十年経っても全人的な医療を達成できる優れた内科医の育成につながると考えています。

教育：内科医としての基本的な知識と技術を徹底的に習得させ、そのうえに臓器別の専門性があるという教育を連綿と行っています。毎朝八時から、前日に入院した患者の検討会を行うなど、臓器グループの枠を超えて全人的な医療を実践しうる医師の育成をしています。

診療：金沢大学附属病院内科のうち、内分泌代謝内科、消化器内科、腎臓内科、リウマチ膠原病内科、循環器内科を担当しています。ひとりの患者は複数の臓器別の病名をもっていますが、先述のように、背景には共通の病態が存在しているため、従来にも増して広い内科の知識と臓器別の専門知識を駆使して診療を行っています。

研究：糖尿病・内分泌代謝、消化器、腎臓・膠原病・高血圧、循環器の四つの研究室・臨床グループが、臨床研究、および臨床に基盤をおいた基礎研究を進めており、その中で大学院生がひとつのテーマを担当し、研究指導医の教育のもと、研究をすすめています。

各研究室の活動：

糖尿病・内分泌代謝グループ（一研）：臨床・発現遺伝子情報、独自に確立した細胞・動物モデル解析から、「過栄養が、肝臓を司令塔とする臓器間ネットワークを変え、二型糖尿病の病態を形成する」仮説を検証しています。糖尿病・肥満症患者の病態を規定する新規肝臓由来生理活性分子（ヘパトカイン）を複数同定し、それらの制御から生活習慣病の根源的な治療を目指しています。栄養士をはじめとする多職種とTeam DiETを結成し、院内では糖尿病患者教育、学外では生活習慣病予防に向けた事業を展開しています。内分泌領域では、外科系や核医学と連携して、甲状腺、下垂体、副腎疾患の臨床と周術期の管理を担当し、内分泌疾患の希有なる症例を解析・報告しています。

消化器グループ（二研）：ウイルス肝炎から肝細胞癌に加えて、我が国だけでも数千万人が罹患している脂肪肝の膨大な患者肝組織や末梢血液などの臨床サンプルを用いてゲノミクス解析を行っており発現遺伝子情報は世界最大級です。肝硬変に対する再生療法の確立を行っており世界初となる治療法の確立を目指しています。癌幹細胞の研究では、腫瘍進展研究、肝癌分類法確立、治療抵抗性機序解明につながる研究をしています。肝細胞癌に対する癌ワクチンおよび生体内の強力な抗原提示細胞である樹状細胞を用いた臨床試験を既に多数例に対して実施し、癌免疫治療の領域をリードしています。臨床面では、国内で有数の経皮的ラジオ波焼灼療法実施施設であり、分子標的薬の臨床試験実施施設です。経頸静脈的肝内門脈肝静脈短絡術、カプセル内視鏡、ダブルバルーン内視鏡、レーザー治療等の先進的な医療を駆使しています。金子教授が班長を務める二つの厚生労働省の班研究を中心として全国レベルの研究をすすめています。

腎臓病・膠原病・高血圧グループ（三研）：臨床病理学的研究、さらにゲノミクス・プロテオミクス解析などの研究から、糖尿病性腎症・腎臓病のエビデンスを発信し、この分野を牽引しています。和田教授が平成二十一年より班長を務める厚生労働省の糖尿病性腎症班研究では、多施設共同コホート研究、病理学的研究から診断基準やレジストリーなどの基盤整備を進めています。慢性炎症に伴う臓器線維化機構、恒常性維持の観点から腎と全身臓器の連関機序、腎コロボーマ症候群の原因遺伝子PAX-2異常等の検討をしています。臨床的にも、血液浄化療法部、泌尿器科はじめ各診療科と連携し、腎臓病、血液浄化療法、腎移植を行い着実に成果をあげています。リウマチ膠原病に関しても、ステロイドパルス療法、分子標的薬をはじめとした免疫抑制療法を行い、難治性血管炎研究班などにも貢献しています。

循環器グループ（四研）：心房細動および虚血性心不全モデルラットを確立し、生理学と分子生物学を融合した研究を進めています。心筋虚血再灌流障害モデルマウスの包括的発現遺伝子解析から、心筋虚血に対する恒常性維持のための新規心臓-肝臓ネットワークを発見しました。脂肪組織由来間葉系間質細胞を用いた心筋再生療法の臨床応用を目指した基礎研究を行っています。患者の筋交感神経活動解析により、疾患、薬物、喫煙等が自律神経活動に及ぼす影響を明らかとし、低心機能症例における病態把握や治療効果判定に応用しています。先進医療として、重症虚血性心疾患に対するエキシマレーザー冠動脈形成術、難治性不整脈に対するCARTOシステムやEnSiteシステムを用いたカテーテルアブレーション、心不全に対する両心室ペーシング、除細動器埋込みを積極的に行なっています。

（篁　俊成　記）

【支部だより】

高知支部

平成二十四年五月二十五日午後七時より、居酒屋「ひつき」に於いて十全同窓会高知支部総会を開催いたしました。

今回は橋本良明先生（高知大学法医学教授　昭和五十一年卒業）が今年四月医学部長にご就任なさいましたので、お祝いをと竹内幹事の計らいで、急遽ご案内、十七名中九名参集いただきました。

当支部は金沢より遥か離れており医大も近県にできたため、新しく入会なさる先生も無くジリ貧の状態、自然消滅の恐れさえも心配されます。しかも他大学入局者がほとんどです。

支部長開会の辞、次いで昨夏物故されました藤原紫朗先生（昭和二十五年卒業）のご冥福をと黙祷を捧げました。市川博和先生（昭和四十二年卒業）に新しく支部長をお願いいたし快くお受けいただきました。

橋本新医学部長のご挨拶を頂き、記念品の贈呈後、新支部長の乾杯で懇親会にうつり、途中写真撮影も酔いつぶれる前に済まし、金沢の思い出話や孫の話と時の経つのを忘れ、予定の二時間を大きく越え十時過ぎに満腹の腹を抱え、またの再会を約して散会となりました。

出席者

写真右列手前より

竹内一八（昭和五十一年卒業）岩﨑英達（昭和三十七年卒業）内田好彦（昭和五十一年卒業）森田荘二郎（昭和五十六年卒業）

左列手前より

山岡昭宏（平成二年卒業）横田哲夫（昭和四十九年卒業）船戸豊彦（昭和四十八年卒業）市川博和（昭和四十二年卒業）橋本良明（昭和五十一年卒業）

以上九名　（岩﨑　英達　記）

愛知支部

平成二十四年六月二日（土）、名鉄ニューグランドホテルにおいて、四十名の参加者を得て、十全同窓会愛知県支部総会が開催されました。この度は、金沢大学創基百五十年を記念し、他学部同窓会と一緒に「金沢大学東海支部合同同窓会」を開催するということで、支部総会は、例年とは異なり手短かに行われました。水上哲秀先生（昭和四十七年卒業）の司会にて開会され、冒頭、逝去されました金子貞夫先生のご冥福をお祈りし全員で起立黙祷を捧げました。次に支部長・尾山淳先生（昭和四十三年卒業）がご挨拶され、本日合同同窓会を開催するに至った経緯をご説明されました。そして、合同同窓会ご出席の岐阜県支部の米倉幸人先生（昭和三十八年卒業）・渡辺幸夫先生（昭和五十六年卒業）がご紹介され、ご挨拶を頂戴しました。篠田雅幸先生（昭和五十一年卒業）より会計報告、それに対する横田徳久先生（昭和三十五年卒業）からの監査報告がなされ、全員の承認を得ました。最後に出席者全員で記念写真撮影を行い、支部総会は終了し、階下の合同同窓会会場へと移動しました。

合同同窓会会場では、受付からして、金沢工業会・法経文学部同窓会の方々の人数と熱気に圧倒される様子でした。同ホテルの宴会場にて、全員着席のスタイルで、合同同窓会は開催されました。来賓の中村信一学長のご同級ということで、愛知県支部長尾山淳先生が開会のご挨拶をされました。その中で、去る五月三十日に金沢市内で開催された「創基百五十年記念式典」にご出席されたことをご報告されました。平野博文文部科学大臣をはじめ、自治体・経済団体・関係大学・海外協定大学・同窓会などからの五百名を超える参列者を迎え、盛大に開催されたそうです。特に、森喜朗元首相による「金沢大学とこれからの高等教育」と題する記念講演が、大学の歴史とご自身の大学への関わりを振り返られ、大変素晴らしかったと、尾山先生は感想を述べられました。

続いて、中村信一学長より、「金沢大学～伝統と創造～」と題する記念講演が行われました。加賀藩彦三種痘所から始まる大学の歴史を概説され、多くの偉大なる先輩を輩出してきたことを強調されました。そして、新制金沢大学設置を経て、法人化、さらには学域学類制に至るまでの経緯もご説明いただきました。その上で、創基百五十年を迎えての記念事業：石碑設置・ワインなどのオリジナルグッズをご紹介されました。特に、留学生支援を目的とした「金沢大学基金」について力説され、海外へチャレンジする学生および海外からの留学生を積極的に支援して、大学の発展を目指す強い姿勢を示されました。さらに、金沢大学の最先端の研究プログラムについてご説明い

ただき、金沢大学が「先魁・共存・創造」をキーワードに、日本の大学トップ一〇となり、「東アジアの知の拠点」を目指す確固としたビジョンを示されました。

次に、合同同窓会開催へご尽力いただきました手繰能彦金沢工業会東海支部長・上野健法経文学部同窓会名古屋支部長・斎藤勲薬学部東海同窓会代表の方々のご紹介があり、代表して手繰能彦様よりご挨拶を頂きました。次いで、本学および各同窓会からの多くの来賓の方々のご紹介が行われました。特に法経文学部同窓会からは東京・関西・福井・富山各支部からご参加いただき、同窓会への熱い思いを感じられました。前川幸次金沢工業会理事長の音頭により乾杯し懇親の場となりました。各テーブルでの各学部内での思い出話に加え、学部を超えた旧交を温めた方も多くおられました。宴も盛り上がってきた頃、北溟寮ご出身の大先輩が壇上に現れ、出席者全員での金沢大学校歌・北の都・南下軍の合唱を行いました。各々が、各々の大学時代を振り返りながらの、大合唱となりました。

最後に、法経文学部同窓会名古屋支部長上野健様の音頭による万歳三唱を行い、再会を誓っての散会となりました。学部の垣根を越えて母校への愛着を培い、卒業業生としての自負心を改めて確認できる大変良い会であったと感じました。

（高味　良行　記）

滋賀支部

平成二十四年度金沢大学医学部十全同窓会滋賀支部総会が、平成二十四年六月十日、琵琶湖東岸のエクシブ琵琶湖で開催されました。同窓会本部より理事長加藤聖先生をお迎えし、支部会員十七名の出席がありました。

支部長浅野定弘先生の開会のご挨拶に続き、加藤聖先生より、金沢大学医学部の現状と将来展望や先生のご研究についてのお話をしていただきました。懇親会では、各先生から近況を話していただき、なごやかに歓談が続きました。

今年は、県湖北地域がこの支部総会を担当しました。県湖北地域の病院には、長浜赤十字病院副院長小野進先生、同病院副院長丸橋和弘先生、平成二十四年四月市立長浜病院院長に就任された多賀俊明先生、平成十九年卒業長浜赤十字病院消化器内科勤務の橋本真理子先生が御活躍されています。

蛇足ながら、当地の周辺には、浅井三姉妹の小谷城址、羽柴秀吉の長浜城、石田三成の佐和山城址、井伊氏の彦根城、織田信長の安土城址、関ヶ原・賤ヶ岳・姉川の各古戦場などの多くの史跡があり、歴史散策もできます。

写真

前列右より、白石制（昭和四十一年卒業）、宮浦靖郎（昭和三十六年卒業）、浅野定弘（昭和四十二年卒業）、加藤聖（理事長）、九谷修（昭和二十五年卒業）、佐伯一善（昭和三十三年卒業）

中列右より、瀬戸山博（平成元年卒業）、小野進（昭和四十七年卒業）、安田美代子（昭和四十九年卒業）、山本明（昭和四十六年卒業）、村居中慈（昭和三十六年卒業）、江竜喜史（昭和三十九年卒業）、朝日晋（昭和四十五年卒業）

後列右より、多賀俊明（昭和五十一年卒業）、安田和弘（昭和四十八年卒業）、丸橋和弘（昭和四十九年卒業）、北村隆（昭和五十二年卒業）

（北村　隆　記）

千葉支部

去る平成二十四年七月二十一日（土）に、平成二十四年度、十全同窓会千葉支部：金沢大学医学部創立百五十周年記念総会、および、井上雄元先生千葉県医師会長就任祝賀会が、千葉市内で四十名の参加で盛大に開催されました。

総会は、生水（しょうず）真紀夫千葉支部長の開会のご挨拶で始まりました。同窓会においても人の繋がりの重要性を若い先生に伝えていく必要性をお話しされました。

司会／進行の水野谷先生は、赤富士を象った金沢の漆塗りを思いおこす見開き時計の記念品の準備、プロジェクターでの金沢の風景や（加藤登紀子による）四高寮歌の歌など、様々な準備と進行を一手に引き受けて奮闘して下さいました。

十全同窓会本部からは加藤聖理事長と井上正樹理事にご参加賜り、「医学部創立百五十周年記念事業及び記念式報告」と「ヒトの寿命に対する一考察」についての記念講演を頂きました。

井上雄元先生の千葉県医師会長ご就任のご挨拶では、十全同窓会会員の先生方の応援が非常に元気づけられたとのお言葉を頂きました。

引き続き、鏡割り、乾杯、記念写真撮

影、懇親会と進みました。

今回は、卒業後に初めて顔を合わせた先生方（二十～三十年ぶりの再会）もいらっしゃり、同じ千葉県にいても、専門科が異なるとなかなか顔を合わせる機会がないようで、同窓会の意義も再認識される機会でした。

二次会参加も十二名と、主賓の先生方も全員ご参加頂き、一次会と同様に非常に盛り上がった時間でした。

千葉支部幹事　高橋敬一（昭和六十年卒業）

写真説明（敬称略）

前列左より

髙野学（昭和四十六年卒業）　伊藤俊夫（昭和三十六年卒業）　生水真紀夫（昭和五十六年卒業）　井上正樹（昭和四十八年卒業）　井上雄元（昭和三十九年卒業）

加藤聖（昭和四十八年卒業）　能川浩二（昭和四十年卒業）　諸岡信裕（昭和四十八年卒業）

関東拡大支部合同総会

平成二十二年度から東京都支部と神奈川県支部は合同で総会を開催していたが、東京、神奈川だけでなく埼玉県支部も千葉県支部にも声をかけて合同の支部総会をしようと昨年の総会で決議されたことを受けて、今年は関東拡大支部総会を開催する運びとなった。

神奈川県支部長小島路久先生、埼玉県支部長瀬戸幹人先生、千葉県支部長生水真紀夫先生のご同意を得て、十全同窓会本部より住所録を入手して、約八百九十名の卒業生にご案内状の送付を開始したのが六月中旬であった。

今年は金沢大学医学部創立百五十周年記念の年であり、七月の金沢での式典には参加できないがすこしでもその雰囲気を知りたいという声が多く、関東拡大支部総会の開催日八月四日（土曜日）の前日までに参加希望者は百名になった。例年の開催場所銀座ライオン六階クラシックホールは、はて百名は入るのだろうか、はらはらした気持ちで当日を迎えた。

小島先生、瀬戸先生、高木先生が率先して受付業務を早くから行って下さり、午後五時前にはすでに多くの会員が会場に集合し、午後五時からの十全同窓会長佐藤保先生のスピーチを待つという状況になった。

十全同窓会会長佐藤先生は、七月に小立野の金沢大学医学部十全講堂で行われた百五十周年記念式典の様子を多くの写真とともに報告くださった。彦三種痘所に始まる百五十年の金沢大学医学部の歴史は圧巻であった。咳ひとつなく、静かに聞き入った。

本年度の講演は、平成四年卒、日本郵船㈱ＮＹＫグループ健康管理センター長の林同文先生にお願いした。林先生は東大第三内科に入局後、矢崎義雄教授、永井良三教授、小室一成教授の指導の下、循環器の臨床・研究に多忙な日々を過ごすとともに、東大医学部百五十周年記念史編集委員として実務的業務の中心人物として活躍された。この編集経緯について興味深い話を約四十分にわたってお話された。周知のように加賀藩上屋敷跡が東大本郷キャンパスであるが、金沢大学医学部初代生化学教授・初代学長である須藤憲三先生は、東京大学在学中、当時の写真を数多く撮られていた。なんと多くの本邦未公開の写真乾板が金沢大学医学部生化学教室から発見され、東大記念史にも多数掲載されたのである。

六時から、本会の長老である日本歯科大学名誉教授古本啓一先生の乾杯のご発声とともに懇親会となった。もうこのころには九十名に達し、人と人の間をぬって移動する状況になってしまった。なつかしい顔を見つけ、あちこちで話しが盛り上がる。

一番の遠方者は以前千葉県支部に所属された奈良県立医大木村教授であった。以前金沢大学医学部第三解剖学教授であられた中村泰尚先生、昨年三月に歯科口腔外科教授を定年退官された山本悦秀先生にも参加いただいた。また、群馬支部、福島支部からも今回参加希望者があり、会を盛り立てていただいた。

卒業年度が同じ同級生は一緒に壇上に上がり近況報告となった。久しぶりの一緒の登壇であり、これもよい思い出となったと思う。

近年の卒業生も参加され、研修医としての近況報告をするが、熟年、老年になった同窓の先生には断然圧倒されて負けている。それにしても、昨年、一昨年卒業した若い研修医が参加してくれたことは最近にないことであり、うれしいことであった。

最後に、平松慶博先生の閉会の挨拶の中で、来年もこの形式で行うことが決議された。

なお、これまで副支部長であった内潟であるが、本年四月の河野照茂支部長の急逝により支部長代行となり、本会で支部長に任命されたことを記す。

（内潟　安子　記）

クラス会

三十五周年記念同窓会
（昭和五十二年卒業）

昭和五十二年医学部卒同窓会は、以前から、富山県の高岡市民病院に勤務されている一柳健次氏、遠山一喜氏、渡辺彰氏の三名が中心となって開催されています。前回は、卒後三十周年となった平成十九年の七月に、金沢市寺町（金茶寮）で開催しました。その際、以後も五年毎に開催し、当番幹事は、石川県、福井県、富山県に在住する卒業生が順に担当すること、次回は同窓生のほぼ全員が還暦を過ぎる節目の年に、卒後三十五周年記念の同窓会として行うことが内定しました。

五年の月日は瞬く間に過ぎ去り、八月十八日（土曜日／宿泊）に、加賀の山代温泉郷の老舗旅館〝瑠璃光〟（るりこう）で卒後三十五周年記念同窓会を開催し、昭和五十二年医学部卒同窓会の顧問をお引き受け頂いている中村信一・金沢大学学長をご招待しました。幹事には、福井県在住の広瀬が指名されていましたが、実際には、上記の三氏が副幹事として、開催日や会場の選定、同窓会員への連絡・出欠の確認など、実務全般を行って頂きました。さらに、小松在住の東野義信氏にも副幹事となって頂き、〝瑠璃光〟の女将と「小松高校の同窓生」であると言う〝よしみ〟を生かして交渉にあたって頂き、〝プロが選ぶ日本のホテル・旅館百選〟にランクされる高級旅館で、〝破格〟の価格で楽しい一夜を過ごすことができました。

同窓会には、計三十三名の同窓生が出席しました。開宴に先立ち、夕六時から、中村学長より、「創立百五十周年記念」を迎えた金沢大学医学部の沿革と記念事業、および、附属病院と医学部の近況や今後の展望などについて、コンピューター・プレゼンテーションで写真を供覧されながらご講話を頂きました。以下に、沿革と記念事業の内容を要約します。

〈金沢大学医学部と金沢大学の沿革〉

・金沢大学医学部は、長崎大学、東京大学に次いで、日本で三番目の古い歴史を有する。

・金沢大学医学部は、文久二年（一八六二年）に、加賀藩が金沢市彦三八番丁（現在の安江町）に開設した種痘所、〝反求舎〟が源である。

・第四高等中学校の医学部が、一八九四年（明治二十七年）に第四高等学校の医学部となった後、一九〇一年（明治三十四年）に分立した金沢医学専門学校が、一九二三年（大正十二年）に旧制の「官立金沢医科大学」となり、さらに、一九四九年（昭和二十四年）に国立に移行して誕生した「金沢大学医学部」こそが、まさに、現在の〝金沢大学の始まり〟である。

〈創立百五十周年記念事業〉

・安江町の彦三郵便局前に、「彦三種痘所跡地、金沢大学発祥の地」と記銘された記念石碑を設置した。

・医学類（旧 医学部）の敷地内に、記念モニュメントとして、金沢医学館第一期卒業生 九名の像である「若き医師たち」の塑像（帯刀した袴姿の立像）を建立した。

・医学部敷地内（十全講堂から正門まで）に、メインプロムナード整備事業が計画されている。

・一八六八年（明治元年）に、金沢藩医・黒川良安が長崎で購入した極めて貴重な紙塑の人体模型（男性体）、「キンストレーキ」（日本には三体のみが現存）が、ホコリやカビ、及び、彩色顔料の剥落などで損傷が著しく、崩落の危険性が高くなったため、美術院・国宝修理所で、約一年半に渡る大修理を終え、医学部記念館に保管・展示された。

・金沢城址内に「金沢大学誕生の地」であることを記した大学公式の石碑を設置した。

中村学長のご講話に続き、昨年秋に東京女子医科大学・糖尿病センターの主任教授に就任された同窓の内潟安子先生から、「糖尿病のお話」と言うテーマで特別講演をして頂きました。とてもわかりやすい内容であり、あらためて、糖尿病の罹患者数の増加、合併症の現状と深刻さについて理解できました。また、講演を通じて、七十名を越える医師を率いる教室のトップしての風格と自信が感じられました。

午後七時過ぎに記念写真撮影を行った後、渡辺同窓会会長の乾杯の音頭で、大座敷での宴会が始まり、楽しく愉快にお酒を酌み交わし、海の幸、山の幸をふんだんに取り揃えた会席料理を味わいながら、往時の思い出、自分や家族の近況などを語り合いました。

宴たけなわとなった頃、一柳幹事の司会で、出席者全員から、一分間の持ち時間で近況報告をして頂きました。酔いがまわり饒舌となり、大幅に制限時間を超える友も多く、声高で愉快な逸話や冗談に対し、大笑いや野次、拍手などが飛び交い、一層の盛会となりました。九時過ぎに、遠山同窓会幹事長の音頭で、一次会は中締めとなりました。

旅館のバーに移動しての二次会では、十一時半過ぎまで、一次会で話せなかった友とも、酒、ワイン、焼酎などで乾杯し、歓談しながら、旧交を暖め合うことができ、とても思い出深い一夜を過ごすことができました。

本稿を終えるに当たり、今回の同窓会の準備と進行にご尽力頂きました一柳、遠山、渡辺、東野副幹事に、深く感謝とお礼を申し上げます。

出席者　三十三名（男性 二十七名、女性 六名）、敬称略

池田（伊藤）正、石田明人、一柳健次、大井仁、小川純、大竹茂樹、加納晃、上村良一、久保実、倉田幸夫、釜本隆行、

次頁3段目につづく

医師会コーナー

千葉県医師会長就任挨拶

井上　雄元（昭和三十九年卒業）

平成二十四年六月二十四日の第百三十八回・千葉県医師会代議員会で千葉県医師会長に選出された井上雄元です。最近二十四年間の千葉県医師会長は千葉大学卒の方々ばかりです。従って、金沢大学卒の私には無理かと思いましたが、千葉大学の生水眞紀夫教授・能川浩二前教授や多くの同窓の先生方の応援をいただき当選させていただきました。同窓の先生方に深く感謝いたします。私は昭和三十九年三月に金沢大学を卒業しました。卒業後の研修は故郷の千葉県で行いました。従って、金沢大学での医局経験はありません。千葉県へ戻り間もなくして父が急逝いたしました。そのために、午前中は自院で診療をし、午後は当時の国立千葉病院及び千葉大学衛生学教室で研鑽する「二足のわらじ」のみならず、「三足わらじ」の日々を送りました。従って医師会活動は昭和四十九年より現在まで、ほぼ継続して行っています。この間、昭和五十七年三月に帝京大学附属市原病院が私の住まいのある市原市に進出いたしました。私は医師会としての反対運動に加わらなかったと云う責任を取り二年間は医師会活動から一切手を引きました。その後、この帝京問題が解決したために昭和五十九年より市原市医師会役員に復帰いたしました。

千葉県医師会との接点は平成4年でした。保険担当理事を五期・一〇年経験後に、平成十四年四月より千葉県医師会副会長を五期・一〇年経験し、本年六月に千葉県医師会会長に選出されました。現在は市原市医師会立市原看護専門学校長も兼務しております。

千葉県は人口こそ六百二十万人を超えていますが、医師数も看護師数も人口一〇万対で比較すると、四十七都道府県中、四十五位・四十六位と極めて低いのが現状です。日本医師会への加入率も低く、課題満載の千葉県医師会ですが、今後の千葉県医師会の舵取りを担当することになりました。

今後とも、ご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。

小島重幸、佐久間寛、田中茂弘、遠山一喜、中西（篠田）耕三、中村毅、中村義弘、西尾真友、野崎外茂次、東野義信、一二三宣秀、広瀬和郎、三川正人、宮崎良一、湯本義治、渡辺彰、内潟安子、小林和美、倉富（友常）靖子、伊藤（長尾）真理、浅香久美子、吉田和代

（広瀬　和郎　記）

平成二十四年度 医薬保健学域特別講義

金沢大学医薬保健学域医学類一年生に対する特別講義も今年度で五回目を数えることになった。石川県医師会が中心となり、臨床現場で働いておられる先生方から学生に話をしていただくものである。今年度は第一回の六月十二日（火）から第五回の七月十日（火）まで、各九十分の講義を行った。内容は以下のとおりであった。

一．地域医療と医師会について
　石川県医師会　会長　近藤　邦夫
　生きるための医療・死ぬための医療
　芳珠記念病院　小児科　多賀　千之

二．各診療科、現場からの声…先生方を囲んで学生との対話
　石川県医師会理事　内科　洞庭　賢一
　石川県医師会理事　外科　斉藤　典才
　石川県医師会理事　精神科　前田　義樹
　石川県立中央病院　産婦人科　平吹　信弥
　サンクリニックやまだ　小児科　山田　燦
　半田内科医院　内科　小川　純

三．女性医師の体験談
　石川県立中央病院　麻酔科　高橋　麗子

研修医の体験談
　石川県立中央病院　炭谷　早紀、寺田　華奈子、澤田　慧

四．過疎地域医療の体験談
　石川県立中央病院　廣谷　太一、大久保　優香

在宅医療
　加賀たちばな元気クリニック　橘　秀樹

五．検診について
　羽柴クリニック　羽柴　厚

医師会について
　半田内科医院　小川　純

（敬称略）

五回の講義は、講師が一方的にしゃべるのではなく、学生との対話を大事にする講義形式をとり、学生に自由に発言してもらう参加型とするように心がけた。学生も、若い研修医からベテランの開業医まで第一線で活躍する医師による話を直接聞くことができて喜んでいたようだった。できれば一年生だけではなく、今から医療の現場へ旅立つ五、六年生にも聞いてもらいたい話であったので、機会があれば実現できればいいなあと思っている。今回ご参加いただいた十六名の先生方に感謝を申し上げたい。

（小川　純　記）

寄稿

元十全同窓会台湾支部長 許　書剣先生のこと

上海のＰＡＰＳ（太平洋小児外科学会）の会場で私を見つけた台湾大学小児外科の頼鴻緒教授がやってきて「許書剣先生が三月に亡くなった」と言われた。九十五歳の高齢であり、最近軽い脳卒中を起こしたと聞いているので、何時かこの日が来ることは覚悟していたが、人一人の死がこれほど私に深い喪失感を与えたことは嘗てなかった。

許先生に初めてお逢いしたのは、卒業後四年目の夏、大阪労災病院のサッカー部が義父の仕事の伝で台湾大学サッカー部の学生と親善試合をした時のことである。試合の夜、台湾大学医学部は盛大な歓迎会を開いてくださった。医学部長、附設医院長を始め九人の教授が出席された。たまたま私の隣に座られたのが許書剣先生であった。心臓外科の教授を除く八人が台北帝国大学か日本の大学を卒業されていたが、金沢大学は許書剣先生だけで、こちらも金沢大学は私ひとりであった。全くの偶然である。親善試合の実現に骨を折って下さった学生課長で病理学の方中民教授が歓迎の歌と称して「酋長の娘」を腰を振り振り歌っているのをみながら、一介の市中病院のサッカー部に示して下さる台湾人の熱烈歓迎を一生忘れないだろうと思った。

二〇〇一年の夏、私は日本小児外科学会近畿地方会に台湾、韓国、中国の小児外科の第一人者を招聘した。台湾からは長庚記念病院の林哲男教授をお呼びした。林先生は台湾大学で許書剣先生から直接外科を学び、今でも非常に親しく付き合っていることを知った。懇親会で林先生に妻（由紀）と長男（祥吾）を紹介した。

二〇〇二年二月、長男の金沢大学医学部の学士入学が決まったので、林先生に伝えると「金沢大学が四人揃ったので大先輩と同窓会をしませんか」と招待して下さった。妻と長男、義母を連れて台北に行った。許書剣先生の奥さんが金沢出身だと聞いていたので、金沢の銘菓や棒茶をお土産にし、戦前の金沢のこと、許書剣先生との出会いの話などを伺うのを楽しみにしていたが、二年前に亡くなったと聞いて痛恨の極みであった。昭和十七年（許先生）、五十年（筆者）、五十一年（妻）と平成十八年（長男）卒と林先生夫妻とでとても楽しいひと時を過ごした。その席で、以前林先生から戦前、東洋一の灌漑事業を行い、今でも台湾では大きな尊敬を集めているという金沢出身の土木建築技師八田與一のことを聞いていたので、次に来る時には彼が設計し指導して造った珊瑚潭をみたいと申し上げた。

二〇〇六年五月、林先生が台北で主催されたＰＡＰＳに参加した。その折、許先生に故宮博物館をゆっくり案内して戴いた。昼食には旅行者が行くことのない珍しい川魚料理をご馳走になった。帰国する朝、許先生は『嘉南大圳の設計者 八田與一』のＤＶＤを泊っていた圓山大飯店まで持ってきて下さった。「これ（ＤＶＤ）の日本語監修は台湾大学名誉教授の陳楷摸先生がしています。嘉南大圳のことを詳しく知りたければ彼にお聞きなさい」と言われた。二〇〇六年九月、私は高雄で開催された台湾小児外科学会（会長は高雄長庚記念病院の荘錦豪教授）に招聘された。帰路、予てより知り合いの中山医科大学（台中）の巫教授に夢にまで見た珊瑚潭（嘉南大圳の水源ダム）を案内して戴いた。木陰にひっそりと佇む八田與一の銅像と墓碑を目の当たりにして妻共々深い感銘を受けた。台北に帰ると、許先生が設立を指導し、陳楷摸先生が院長をしている國泰綜合医院で私のために講演会が準備されていた。平日の午前だというのに大勢の先生が集まって下さっていた。「新生児外科の最近の進歩」を講演した。最前列で許先生も熱心に聴いて下さっていた。講演会の後、あの方中民先生が来られていて、立派に表装された般若心経の写経を下さった。陳楷摸先生に午餐に招待され、日本統治下、日本は嘉南大圳のみならず如何に台湾の近代化に貢献したかというお話をされた。今の日本人はそのことを知らな過ぎると嘆いておられた。この台湾旅行は許書剣先生のお蔭で生涯忘れ得ぬものとなった。

二〇〇八年の年末、私は陳楷摸先生を日本消化器外科学会（二〇〇九年、会長は塩崎均近畿大学教授）に招聘する交渉をしに台湾に行った（一旦は引き受けて戴いたが、体調不良のため代わりに荘錦豪教授に来て戴いた）。國泰綜合医院のカンファランス室は朝から熱気に満ちていた。脳出血の手術後の陳楷摸先生（麻酔から覚めて最初に発した言葉は日本語だったという）も九十歳を優に超えた許書剣先生も出席されていた。驚く私に林先生は、許先生は今でも台湾大学にある研究室に行き、学生の講義も外来もしていると言われた。もっと感銘を受けたことは、日本外科学会誌、消化器外科学会誌に掲載される優秀論文のダイジェスト版を作られて台湾の外科学会雑誌に長い間連載してこられたと聞いたことである。

上海のＰＡＰＳから帰国された頼鴻緒教授から『外科教授之教授 許書剣教授玖拾大壽専刊』が送られてきた。そこには台湾外科学会の指導者からの長寿の祝辞と、許先生が如何に台湾外科学会にとって「外科教授之教授」であったかが書かれていた。私の親友である荘錦豪教授は、「台湾大学で初めて許教授に手術の指導を受けた時、外科医らしからぬ静かさと礼儀正しさから日本の武士道を連想し、そのメスはルース・ベネディクトの『菊と刀』の刀であった」と回想している。

許書剣先生の冥福を祈るや切である。（許先生との交流の詳細は拙書『小児外科医のまわり道』（鳥影社）をみて戴ければ幸いです）

（窪田　昭男　記）

台湾小児外科学会（2006.9、高雄）の帰路、國泰綜合医院にて前列左から許書剣先生、陳楷摸先生、後列左から陳徳芳先生、筆者、妻

平成二十四年度 オープンキャンパス

平成二十四年度の医学類オープンキャンパスは八月九日、十日の二日間にわたり、宝町キャンパスにて行われた。参加者数は年々増加傾向を示し、今年度は二日間で五百人に上った。高校一―二年生の参加者が中心であったが、父兄の参加者も多くみられ、医学類に対する関心の高さがうかがわれた。両日とも午前の部と午後の部に分かれ、計四回、ほぼ例年通りのプログラムで行われたが、今年から新たに午前の部に模擬講義、午後の部に研究室紹介および記念館資料室見学が組み込まれ、よりバラエティに富んだものとなった。

内容としては、まず、金沢醫科大学時代の教育・研究・診療風景をまとめたDVDの鑑賞に始まり、続いて山本健医学類長から、医学類に進学するという意味、医師になる際の動機、臨床医の業務などについて説明がなされた。それに引き続き、堀学生支援委員長から医学類の魅力、医学類での教育および学生生活（サークル活動、学生支援体制、医学展）について説明が行われた。

また、午前中行われた模擬講義では、九日は「体の仕組みと痛みの不思議」というタイトルで学生募集委員でもある機能解剖学の尾崎教授が、十日は「心臓・血管の正常と異常」というタイトルで臓器機能制御学の山岸教授が行った。日常誰もが遭遇する痛み、あるいは日本人死因の第二位である心疾患について、わかりやすい説明がなされ、高校生に大変好評であった。午後行われた教室紹介では、九日は「二十一世紀は予防の時代である」というタイトルで環境生態医学・公衆衛生学の中村裕之教授が、十日は「耳鼻咽喉科・頭頸部外科研究室から」というタイトルで感覚運動病態学の吉崎教授が行い、予防医学研究の重要性、および多忙な中にもやりがいのある臨床医の生活が紹介された。

更に、教員・医学類生との懇談会では、教育委員会メンバーの多久和教授、吉崎教授、更に医学類五年生も加わり、参加者からの質問をもとに進められた。特に医学類の学生生活や入試について現役の医学類生の意見を聞くことができ、非常に有意義であった、という参加者からの意見が聞かれた。

最後に、今年から始まった記念館資料室見学では、参加者はキンストレーキや解体新書など、医学類の歴史を感じさせる展示物を実際に見学し、高校生のみならず、父兄の方にも好評であった。

全体を通じて、例年にも増して盛況なオープンキャンパスであった。今後も、オープンキャンパスを通じて医学類の歴史、教育、研究、診療が特に若い世代に紹介され、ひいてはより良い学生の受け入れにつながればと思う次第である。

（学生支援委員会委員長　堀　修　記）

二〇一二年度 医学展開催に向けて

昨年に引き続き、今年度も医学展を開催することが決定致しました。二〇一二年度医学展開催に向けて、同窓会の皆様方にはご支援ご協力を賜り、医学展実行委員一同深く御礼申し上げます。

本年度は金沢大学創基百五十年を迎えました。金沢大学の歴史は長く、文久二年の加賀藩種痘所に始まります。医学展の歴史も同様に古く、昭和二十七年の官立金沢医科大学時代に始まります。

この長い歴史の中で、医学展は常に医学を発信する場であり、同時に私達学生に医学を見つめ直させてくれる場でありました。本年度もその伝統は変わることなく、医学展に来て下さった方に少しでも医学に興味を持っていただき、医療の普及に微力ながらも貢献できればと考えております。

医学展は本年度から正式に学校行事として認めていただきました。私たちはその責任を真摯に受け止めつつ、より大きなものを創りあげたいと考えております。今まで行なってきた病院見学や内視鏡体験などに加え、新たに救急車展示や動物を使った解剖企画（予定）、金沢美術工芸大学とのコラボレーションなど、今までに無かった企画も多数予定しております。また、医学をより身近にすべく、体験を重視した企画も多数考えております。

私達の想いは、この医学展に来て下さった方々に医学を楽しんでほしい。また近年キャンパス移動などで希薄になってきている他学類との学生間の連携をより強固なものとし、将来のチーム医療を担う私達学生間の交流の場であって欲しい。更には、私達が普段生活する上でお世話になっている小立野商店街の方々や、近隣にいながら接点の少ない金沢美術工芸大学の学生たちと共に、医学を通じてコミュニケーションをとりたい。そういった想いで本年度のテーマを「奏 since1862」としました。地域の方々と、また先生方と学生で、更には学生同士の間で様々なハーモニーを奏でることが出来ればと考えております。

一学生に過ぎない私個人の意見を書いておこがましいのですが、近年の医療不信の背景には、医療に対する理解不足が原因の一つとしてあると思います。私たちは学生という立場からこの問題を払拭すべく、医をより身近なものにするために、この医学展という場で努力していこうと考えております。

このような機会を与えていただいたことに深く感謝しつつ、学生として今何ができるかを考えながら、貪欲に取り組んでいく所存でございます。お忙しい中恐縮ですが、足を運んでいただけますと幸いです。

末筆ではございますが、日頃からのご支援、ご鞭撻に感謝してご挨拶とさせて頂きます。

（医学展実行委員　委員長
五年　山本　森太郎　記）

十全昔話

昭和十六年四月入学組　定員六十八名
学年主任　上野　一晴教授

瀧　邦彦（昭和十九年卒業）

第四高等学校、富山高等学校、松本高等学校、弘前高等学校、第八高等学校、東北帝国大学、大阪帝国大学、京都帝国大学、全国公私立薬学専門学校卒業又は中退の混成学年であった。上野一晴生理学教授は講義の中で「兎（ウサギ）の肺はかくも桜色できれいなのは」「兎は煙草を吸はんからである」と云う名台詞は毎年の講義のきまり文句であった様である。系統解剖は岡本規矩男教授、組織解剖は佐口栄・石丸士郎教授であった。

岡本教授は名講義で、黒板の図示は両手にチョークを持っての解説は実に見事であった。人体実習で肝の中葉異常を報告した時の先生の喜び様は今でも忘れられない。これは実に珍しい、早速ラウベルに解剖書に報告しようと大変な熱の入れ様であった。佐口教授の胎生学は有名であり、講義にさえ出席しておれば学士試験の勉強する必要がないと先輩の伝言であった。佐口教授の組織学の講義は流暢な名講義ではなかったが、とつとつとした講義ではあったが微に入り細に入り学問の深遠さを学んだ。佐口教授は金沢市内の電車の組織系統に全く無知で、よく電車を乗り違えされたと陰口をたいた者が居たと云う。眞偽の程は知らない。石丸士郎先生には学士試験で大変お世話になりました。医化学（生化学）の岩崎憲（ケン・ヒロシ）教授担当、昭和十六年十七年頃は岩崎教授はアツォトメトリーの微量定量法の研究に教室あげてのテーマに没頭されている状態であった。先生は独逸留学中にマイヤーホフやオーベルマイヤーと一緒に勉強されノーベル化学賞の受賞を夢みておられたらしい。昭和二十三年卒業の林隆文先生は生化学教室の出身で愛弟子でありました。

先生の晩年のお世話をお子様共々懇切になされたとうかがっています。恩師を思う子弟愛に感ずるところ大なるものがある。私は旧制高校文科出身の為一番苦手な学科であったが、畏友谷口幸嘉君と高樹正浩君はそれぞれ富山薬専と第四高等学校理科の出身であり、実習中は手とり足とりの面倒をみてもらって実験レポートを提出することが出来、留年することなく無事学士試験を通過したことはこの二人のお陰であった。今や両名共他界し心からご冥福をお祈りする次第である。谷口君は秀才であり和歌山県那手中学出身、四つの薬専受験はオールパーフェクトで名門富山薬専を経て金沢医科大学に入学した秀才で、在学中私は全てに援助してもらった。終生の友人であり、戦後和歌山の実家にもお邪魔して近くにある華岡清州の墓参りもさせてもらい高野山にも詣ることが出来た。彼は晩年クラス会を主催してくれ、勝浦温泉や高野山で開催してくれたクラス会は大変楽しいものであった。現在も谷口家との交際は続いている。実に刎頸の学友であった。四高出身の高樹正浩君は海軍依託学生で終戦後保健所長を歴任し、実に頭の良い学友であった。私の戦友会が松山であった折、丸亀よりご夫婦で松山まで面会に来てくれたのが最后の別れであった。昭和十六年十二月八日第二次世界大戦が勃発し日本海軍が眞珠湾を攻撃し絶大なる戦果をあげたと、当日朝登校した折軍艦マーチ入りで大本営の発表があり、大学は異様な興奮の雰囲気に包まれ、みんなそわそわした状態であったことを覚えている。学内の学生達も緊張の堝に入り愈々学徒出陣も迫り来た状況であった。我々医学生も現役軍医志願を決意せざるを得なかった。其後戦時下の医科大学もすっかり様変りした。大学の研究室の医師達も次々と応召軍医予備員として軍籍に身を投じられた。私が谷野内科で初めて血球計算を教はった、荒木一郎先生（昭和十三年卒業）も出征され南方戦線で戦死された。学生であった私は大変ショックであった。先生のご冥福を心からお祈りしたい。第二学年細菌学谷友次教授、病理学の中村八太郎教授は戦時中とは云え、毎日厳格な授業が進められた。学士試験は全て口答試問であり、竹筒の竹の棒を引きクジ引き形式で竹棒の根元の番号によってそのNo.の問題を口答で喋る試験で、教授室に入る時の気分は又格別であり教授室の机の上にお菓子が置いてあり食べても良いことになっているが、食べる勇気のある学友は一人も居らなかった。みんな眞剣な顔付きで学士試験を受け、私等は中村八太郎先生の試験は何も答えれなかったことを覚えている。谷教授にも叱られたことを覚えている。臨床は谷野富有夫教授と大里俊吾教授、外科熊埜御堂進教授、久留勝教授であり、久留教授は癌研外科部長より転任されたばかりであった。

大里教授は絵画部部長をしていただき、金沢市北間の故高光一也画伯を招聘しての部活は一生忘れられない。学問では大変きびしかった大里教授も部活では実に優しい先生で時々お伴をして寫生会に出かけたことも有り、私が卒業の時頂いた油彩は現在も拙宅の応接間に掲げてあり、昭和十九年の春頃先生が静岡の内科学会に出席された折の作品で、日本の将来は決して明るく無いことを示唆された富士山の油彩で、六号位で質素なボードに画かれた絵は晴雲が立ちこめたものである。爲瀧邦彦君祈武運長久と爲書きされている。復員後先生のお弟子さん達から良く譲り受けたいとせがまれたが、私の記念の作品として飾らせてもらっている。

又先生が私の外地佛領印度支那河内の南方第四陸軍病院に勤務中、毎月四季の花をハガキに書き慰問状をいただいたことも終生忘れられない。学問にはきびしく人情の細やかな先生であった。後刻先生は金沢医科大学内科教授より東北大学の熊谷教授の後任と赴任され金沢を離れられた。其後福島医科大学々長として活躍され、終生忘れることの出来ない肺結核について学んだ大家でありました。復員後東北大学に先生を慕って入局を申し込んだ時、君は家族も多いことだから母校の金沢にて勉強せよとおっしゃられた先生の言葉を今も忘れることは出来ない。現在でも謹厳な先生の顔が眼前に浮かんでくる様である。故高光一也画伯について学ばれる先生は、一学生の如く固い椅子に坐って話を聞かれる先生のお姿は神様の様であった。その謙虚さに胸を

次頁3段目につづく

私の思い

平成二十二年十一月二十三日

井上　雄元（昭和三十九年卒業）

先ず、自己紹介をさせてください。私は昭和三十九年卒業の井上雄元です。「生まれも育ちも千葉県」と云いたいのですが、父が船医のために神戸で生まれたそうです。第二次世界大戦の真っ只中のために、母の故郷の千葉県（市原市）へ疎開し、その後は市原に居着いてしまいました。そのために生粋の千葉県人の感覚です。父は敗戦に伴い、市原で診療所を開院いたしました。

金沢大学に入学した当初は、周囲に誰一人として知人も居ず、金沢の方言も分からず、下宿の子どもに冷やかされたことを今でも記憶しています。先ず最初に憶えた方言は「井上さんはダラや」でした。また、金沢は千葉と気候が全く異なることも知りました。「弁当忘れても傘忘れるな」の気候に悩まされ、卒業と同時に千葉へ帰って来てしまいました。今ならば地域枠の模範生ですね？一方、私とは全く逆で、千葉は乾燥していて生活しにくいと訴え、一年ほどで金沢へ帰られた方もいると、風の便りで聞いたこともあります。

千葉での生活ですが、今で言えば「過労死」でしょうか、父は二十軒以上の往診に耐え切れずに自宅に戻り、そのまま帰らぬ人になってしまいました。そのために若くして一家の大黒柱とならざるを得ず、父の後を継ぐことになりました。三十二才の若さで、です。当地は田舎のこと故、内科のみでは開業できず、小児科の勉強もせねばなりません。そのために、当院の近くにある県立鶴舞病院・准看護婦学校の先生として採用していただき、准看護学生と一緒に勉強をいたしました。当時の学生さんには、さぞ大迷惑だったと反省しています。

そう言うわけで、市原市医師会理事は昭和四十九年よりさせていただいています。昭和五十七年に市原市に帝京大学病院の誘致運動が起こり、私は病院誘致賛成派のために理事を辞職せざるを得ませんでした。しかし帝京大学病院開院とともに、誘致賛成派の代表として、市原市医師会副会長として再度任命され、以後、継続して医師会活動をしております。現在は、千葉県医師会副会長、日本医師会理事、市原看護専門学校長、帝京大学臨床客員教授等を拝命しております。

日本医師会理事には、小森貴・石川県医師会長もご一緒です。前期の理事には、私と同級の、松田尚武・福井県医師会長、そして私の先輩の、福田孜・前富山県医師会長もおりました。

今まで長きに亘り医師会活動をして来ましたが、若い先生方には高い理想に向かって突き進んでいただきたいと思います。私は、後輩の先生方に認めて貰えるようなことは、何一つしておりません。しかし、父が急逝した際には留学の話の真っ最中でした。私は、いつかは、私が育ったこの地で開業したいと思っていたので、少し早い気がしましたが、患者さんに学ばせて貰いながら、看護学生と一緒に学びながら仕事をすれば必ず出来ると思い、開業いたしました。帝京大学病院が市原市に進出した場合は、我々の収入に影響がないとは云えませんが、帝京大学と共存を図れば良いと単純に思っていました。

日本医師会レベルで考えれば、今後も種々の問題が山積して来るでしょう。今でも、消費税の問題、診療報酬と介護報酬の同時改定、医学部新設問題、メディカルスクール、医療特区、混合診療、医療ツーリズム、特定看護師の問題、指導監査等、書ききれないほどの問題が山積されています。千葉県でも同様です。しかし、最も心配するのは財源問題だと思います。

日本医師会はこの原稿が公表される頃には「グランドデザイン二〇一〇（仮称）」を発表していることと思います。私の市の国保財政は、既に滞納者が二〇％弱にもなっています。一歩舵取りを誤れば「日本沈没」が現実になってしまいます。政治家の方だけの問題ではありません。私は「政治家＝オールマイティー」とは思っていません。全てとは云わないまでも、もう少し専門家の意見を聞いて貰いたいと思っています。

先日、原中勝征・日本医師会長が、日本医師会理事会で、日医が「行政の企画立案の段階から取り組まない事業には協力しないこともあり得る」と云う発言をしていました。私も、全てとは云いませんが、そのような気持ちで突き進みたいと思っています。

若い先生方には高尚な目標に向かって仕事をして貰いたいと思います。

拙い文章ですが、後輩の先生方の参考になれば幸いです。

お互いに頑張りましょう。

打たれる思いであった。先生は眞に油絵を愛された。

若い高光先生は将来立派な画伯になられることを見越しての招聘であった。高光先生は戦后文化勲章の受賞者であり、金沢の誇る宮本三郎画伯と並び称される大家であった。金沢美大の教授として活躍された。富山でも多くのお弟子さんが活躍されている。

昭和十九年六月短縮卒業となり六月假卒業し、私は陸軍短期軍医志願に応募し、軍医候補生採用内定者として陸軍に入ることとなった。其の後内地勤務を経て軍医中尉に任官し戦友は北方・南方戦線に各々赴任した。委託学生であった軍医は内地勤務が多かった様である。私はシンガポール・ハノイを歴任し、南方第四陸軍病院外科主任を最後に復員した。現在故郷で開業六十五年、九十三才の老医師となった。平成二十四年七月七日金沢大学医学部百五十周年記念祭の末席を汚したいとの思いを込めて拙文を書いた次第である。

（瀧　邦彦　記）

学生コーナー

将来の夢

医学類四年　関山　紘子

数ヶ月前この学生コーナーの執筆の依頼を受けたとき、私にとってはプレッシャーでしかありませんでした。先輩方はどのようなことを書いているのだろうと思いバックナンバーを読んでみました。するとさらにプレッシャーになりました。まずこの会報はこの先何年も保存されることがわかったからです。そして先輩方が書いたものは、ユーモアにとんだ文章だったり、医学生としての自覚や理想の医師像を語る文章だったり、文才もなく平凡な学生生活を送っている私には到底書けないような文章だったからです。そこで私はかっこいい文章を目指さず、今思うことを正直に書こうと思います。

「あっという間」という言葉が本当にぴったりくるような速さで時間は過ぎていき、気がつけばもう四年生の講義も半分近くを終えました。金沢大学へ入学し、地元を離れて初めての土地での初めての一人暮らし。クラスメイトもさまざまな地域の人たちで、一年生のときは周りの環境に慣れることに必死でした。二年生になり、医学の専門の講義が始まりました。解剖学実習では人体の構造をはじめて目の当たりにし、その複雑さ、そしてこれから学ばなければならないことの膨大さに圧倒されました。二年生、三年生の授業は基礎医学がほとんどで、自分のイメージしていた「お医者さん」にはなかなか結びつかず、正直なところあまり興味を持てないでいました。医者になるのだから興味にかかわらず知識を確実に身に付けなければならないというのが正論ですが、意志の弱い私はテスト前にならないとろくに勉強もせず、どうして医学部にいるのだろうと疑問に思うことさえありました。

そもそも私が医学部を選んだきっかけは、本当に単純なものでした。「キャビンアテンダントってキレイでいいな」とか、「ＯＬになって寿退社して、幸せな家庭を築きたいな」というのと同じで、なかでも「お医者さんってかっこいいな」というのが一番しっくりきたのでこの道に進むことを決めました。クラスメイトのなかには将来のビジョンがしっかり見えていて、志望する科も決まっている人もいます。そういう人に比べればかなり出遅れているのかもしれませんが、今はまだこの先自分がどういう医師になれるのか想像もつきません。

四年生になり、臨床講義が始まりました。小さい頃からイメージしていた「お医者さん」に直結するような講義が聞けるのだと、とてもワクワクしていたのを覚えています。臨床の先生方のしてくださる話はとてもおもしろいし、実際に働く場が想像できて聞き入ってしまう講義が多いです。教科書でしか知らなかった疾患や症状の実例をあげていただいたり、画像、動画を用いて教えていただいたりすると、今までの知識が実感にかわっていきます。先生方のなかには一般的なことだけでなく、どのような患者さんに出会い、どのような経緯で治療を選択し、そしていまその患者さんはどう過ごしているのかを熱心に話してくださる先生がいます。たとえ治癒が見込めない病状であっても「少しでもＱＯＬを上げてあげたい」と思う気持ちや、新しい治療法を確立させたいという気持ちを熱く語る先生はとてもかっこよくみえます。

先日ある科目で、ＢＳＬ中の五年生が授業に一緒に参加するという機会がありました。その授業で先生は画像を示しながら五年生に向かって「どこが障害されていますか」「どのような症状が考えられますか」と質問をしました。私にはまったくわかりませんでしたが、その五年生はスラスラと答えました。しかも一人ではなくそこにいた四人全員が答えられたのです。一年後には私もこうなってなければいけないのかと思うと本当になれるのかどうかとても不安になります。

二年半ほど専門科目の講義をうけてきている私たちには、クラス内でさえかなりの差ができてきているように思います。毎回講義を真剣に聞いていた人、少しでも多くのことを吸収しようと勉強していた人、それから私みたいにテストを通すだけだった人との間にできる差です。臨床科目の勉強をしていると、二、三年生のころの知識が必要なことが多く、その度に自分の知識不足を感じます。

勉学面だけでなく、大学生活の送り方は本当に人それぞれです。留学して語学力を向上させている人、病院見学をたくさんしている人、部活動で活躍している人、人付き合いがうまくて友達がたくさんいる人、世界各地を旅行している人、などなどです。周りの友達をみていると、勉強面で尊敬することばかりでなく、いろいろな経験をしていてうらやましいと感じることがよくあります。そういう経験から価値観が広がり、他人の気持ちが理解できる人へと成長できるのだろうと思うからです。かっこいいお医者さんになるには、技術面や知識面で不安を与えないのはもちろんのこと、患者さんの気持ちに寄り添えるような人にならなければいけないと思います。私は勉強不足だし、誰にでも自慢できるような熱く語れるような経験はないのかもしれません。でも私に強みがあるとしたら、そういう尊敬できる友達をもったことかな、と思います。いつも努力している友達や、自分にはない価値観をもった友達と接することで、このままではいけないなと焦ることができます。焦ってなにもしないのでは意味がないけど、友達の真似をしてなにか少しでも行動をおこすことを続けていけば、成長できるのだと思っています。世の中にはあっと驚くようなことをやってのける人がたくさんいます。私にはそんな実力も才能もないし、身近な友達の真似をするぐらいしかできないです。でも信じていればいつかその行動も役に立つことがある！とスティーブジョブズ氏のスピーチを聞いたときに思いました。すごいことじゃなくても、ありきたりなことでも、信じて続けられることを続けていこうと思います。

情熱大陸やプロフェッショナルに出られるような医師にはなれなくても、誰かに仕事の話をしたときに「かっこいいなー」と思ってもらえるような、私のイメージしていた「お医者さん」になりたいです。

学生、この貴重な時間

医学類四年　相馬　麻由子

只今、八月も終わりに差し掛かる日の朝六時三十分、朝日の差し込む大阪のとあるファーストフード店。周りを見渡すと、様々な人がいる。朝早くから寝ている社会人。夏休みで遊びに来たと思われる学生。楽しそうに話している人。ボーっとしている人。一人の人、大勢でいる人…。そんな店内で、金沢大学の医学生としての自分の立場について、最近想うことや自分の中での葛藤を綴っていこうと思う。

私自身のことを紹介させていただくと、長野県出身で、身内の死や、尊敬する医師の話を聞くなどした経験を通して、幼い頃から医師になることが夢であった。公立中学・高校を経て、一年間東京で予備校生活を送り、金沢大学医学類に入学することができた。

一年間、予備校で多少なりとも苦しい浪人生活を送り、その時は何が何でも医師になりたいと思っていた。医学生になった自分、医師になってからの自分を想像しては、自分自身を奮い立たせ、期待と希望に胸を膨らませていた。やりたい事がどんどん自分の中で生まれて、夢は大きくなる一方であった。金沢大学医学類への入学が決まった時には、心から喜び、勉学はもちろんであるが、サークルや部活にも入り、興味のあることは何でもしよう、と意気込んでいた。

しかし、大学生になると、これまで以上に様々なことを考えるようになる。それには、様々なところに理由があると思う。専門の分野を主体的に勉強するようになる、自分自身の将来をじっくり考えるようになる、親元から離れて一人暮らしをするようになる、自由である、など…。社会に出て自立する一歩手前のこの立場。医学生は六年間をその立場で過ごす。その中で、多くの人が色んな壁にぶつかることがあると思う。私もその一人だ。

学生の本分は勉学である。そのために定期試験や国家試験がある。しかし、これまでの学生生活の中で、時には初心を失くしてしまうことがあった。目標を見失ったり、医師になっている自分が想像できなくなったり…。そうしているうちに、勉学に対してもモチベーションが下がってしまうことがあった。周りの学生が一生懸命に勉学に励んでいることに対し、焦りを感じていたりもした。そんな私が、また初心を取り戻し、頑張ろう、と思えたのは、周りの人々の支えと、何より自分自身で動き続けたことである、と思う。悩んでいる間、勉学を諦めずに続けることで、人体の神秘に感動し、その神秘を学ぶことに楽しさを見出すことができた。また、サークルや部活など、自分が所属しているコミュニティに参加し続けることで、新たな考えが生まれたり、そこで出会った人々に影響を受けたりした。

私の出会いの中で一つ例を挙げると、私は金沢大学のある医療系のサークルに入っているのだが、そこで夏休みの二週間を使って国際医療に触れる機会があった。三年時の夏、フィリピン、首都マニラがあるルソン島のスービックという土地で、ある二人の日本人女性と出会った。一人は助産師の方で、その土地に住むフィリピン人の、特に貧しい人々のお産と健康を守っている。もう一人は、そのクリニックの隣で学校へ行っていない子どものための学校を運営している。そこで見たものは私にとって非常に衝撃的で、学んだことは本当にたくさんあった。現地の人々のたくましさ、日本の環境の功罪、国際協力の在り方…。語り始めればキリがない。そこの人々は、自分を殺すことは決してしない。努力することを諦めても、生きることを諦めない。どんな状況にあっても、必死で生きようとしている。そして、二人の日本人女性は、そんな〝人〟々と真剣に、真正面から向き合っていた。現地に行って、たくましいフィリピン人、そしてそこの人々の幸せのために動く日本人を見て、改めて、医師になりたい、と強く思った。「医学」だけではなく、多くの視点を持った医師に。

医師という職業は本当に多くの可能性を秘めていると思う。その人の病気の背景にはその人の生活が大きく関わっている。病気と向き合う時、その人自身を理解しようとしないと解決できない問題がある。医療が、「病気を見ずして人を診よ」と言われる所以だと思う。

また、解明されていない部分も本当に多く、西洋医学、東洋医学とあるように、ひと口に医学と言っても非常に奥が深い。だからこそ、魅力的な職業であり、私が生涯成し遂げたいと思う職業である。私はフィリピンのスービックという地に行き、自分が医師を目指していた情熱をまた違う形で引き起こすことができた。

世の中には人がひしめいている。そのうちの何人の人々と出会うことができるかわからないが、多くの人々と出会い、多くの考えを吸収したい。それが必ず自分の糧となるはずだから。

学生の本分は勉学である。しかし、勉学だけでは補いきれない、人間性の変化、成長もまた、学生の本分であると思う。学生という立場だからこそ、迷うことや壁にぶつかることもたくさんある。同時に、学生にしかできないことも本当にたくさんある。悩むことも含めて、人と出会うこと、自分の将来について考えること、色んな人と出会い語り合うこと、挑戦すること、何かを続けていくこと、自分という存在を見つめること…　そこから見えてくるものが、今の私を支え、励ましている。現在はもう医師になること、生きていくことに対しての迷いはない。残りの学生生活も、初心を忘れず、更に変化、成長に対して貪欲でありたい。そして、自分自身が納得のいく医師になるための準備をしていく。振り返った時に満足のいく学生生活であればいい、と思う。

お詫びと訂正

第百五十一号の病院紹介（十六頁）で、富山市民病院の石田陽一先生の役職が誤っておりました。正しくは院長代理でいらっしゃいます。編集委員会の手落ちでご迷惑をおかけ致しました。ここにお詫び申し上げます。

（編集委員長　大島）

第６回金沢大学ホームカミングデイ

卒業生の皆様に 創基150年を迎えた母校の‘今’を紹介します

2012年 11月10日

今年で６回目を迎えるホームカミングデイは，11月10日（土）に開催することになりました。今年は，本学の国際化をさらに促進するため「留学生ホームカミングデイ」も初めて同時開催いたします。皆様を歓迎する学部等の独自企画も準備しており，創基150年を迎えた母校の‘今’をご堪能いただきたいと思います。

金沢城公園の五十間長屋で記念の懇親交流会（有料：先着150名）も開催いたします。ぜひ，ご家族とご一緒に，また同期会やサークル仲間などにも広く声をかけていただき，初冬の金沢にお越しくださるようお待ちしております。

申込締切 10月26日

受付 角間キャンパス自然科学本館（会場）正面入口（アカデミックホール）

参加費 無料

みなさまのお越しをお待ちする中村信一学長

プログラム概要

9:00 受付開始

＜第６回ホームカミングデイ歓迎式典＞

10:00 開会（校歌斉唱）／学長歓迎の挨拶

10:15 学友会会長挨拶／各同窓会代表者等紹介

10:25 学長表彰（学生）／金沢大学基金への高額寄附者紹介

10:55 記念講演 ： 伊藤寛治氏 飛島建設㈱代表取締役社長（昭和49年工学部卒）

11:25 閉会

＜金沢大学学友会第２回役員総会＞

11:30 開会

12:00 閉会

＜昼食・休憩＞

金沢城 石川門

＜留学生ホームカミングデイ＞

13:30～16:30（角間キャンパス）

＜部局独自歓迎企画＞

13:30～16:30（角間キャンパス，宝町キャンパス）

- 学域・学類・研究科等の教育研究活動紹介
- 卒業生との懇談会
- 高安賞・臼井国際奨学金等記念シンポジウム

16:30 **＜学生サークル等によるアトラクション等（角間キャンパス）＞**

17:15 終了

17:30 石川門・片町・武蔵・JR金沢駅方面へバスで移動（希望者）

18:00 **＜ホームカミングデイ記念懇親交流会（金沢城公園五十間長屋）＞**

20:00 閉会

有料（5千円），先着申込150名限定　受付締切：8月15日

懇親会参加申込みの方には，参加費払込書を順次お送りします。懇親会場の受付で領収書（払込書控）をお示しください。

昨年十一月五日、ホームカミングデイ開催に合わせて設置された石碑「金沢大学発祥の地」（金沢市彦三郵便局前）

写真展 「よみがえる城内キャンパス」

11月１日～11月14日＜金沢城公園＞

参加申込み・ご照会等は，ハガキ，メール，電話，FAXなど適宜の方法で，学友支援室までご連絡ください。

角間キャンパス東方上空から金沢市街地を望む

金沢大学学友支援室　〒920-1192　金沢市角間町　金沢大学本部棟５階
電話 076-264-5081　FAX.076-234-4015　E-mail：gakuyu@adm.kanazawa-u.ac.jp

金沢大学 KANAZAWA

金沢大学基金
〝創基百五十年記念留学生支援キャンペーン寄附募集〟
ご協力のお願い

金沢大学では、平成二十四年五月三十日から三年間、金沢大学基金〝創基百五十年記念留学生支援キャンペーン寄附募集〟（目標額五億円）を推進しています。ぜひご協力をお願いします。詳しくは、ホームページをご覧いただくか、基金室にご照会ください。

【金沢大学基金室】
電話　〇七六－二六四－五〇七五
ＦＡＸ　〇七六－二三四－四〇一五
E-mail: kikin@adm.kanazawa-u.ac.jp
ＵＲＬ:
http://www.kikin.kanazawa-u.ac.jp/kikin/150/

編集後記

平成二十四年（二〇一二年）七月七日午前十時から十全講堂において、金沢大学医学部創立百五十周年記念式典・講演会が行われた。百五十周年記念事業実行委員長山本健医薬保健学域医学類長の式辞に始まり、中村信一学長、文部科学省高等教育局の村田善則医学教育課長、前田家十八代当主前田利祐氏がそれぞれ祝辞を述べられ、続いて、谷本正憲石川県知事と山野之義金沢市長の祝辞の代読があった。

五十年前の昭和三十七年（一九六二年）十一月三日、当時の金沢市観光会館で医学部創立百年祭式典が、二千名の参加者を得て行われた。当時小生はアメリカ留学中で、その時の雰囲気は十全同窓会会報の記事より知る他はなかった。

記念式典に続き、京大特任教授本庶　佑氏の「遺伝子が語る生命像」と東大名誉教授で建築家の安藤忠雄氏の「これからの日本のあり方について」の講演があった。その中で、安藤氏の最初のスライドに感銘した。それは世界でも有数の古い大学で、一五〇〇年代から解剖が行われていたイタリアのボローニャ大学の解剖台を中心にした階段教室の写真である。今、金沢大学医学部に残っている古い建物は旧図書館の書庫、解剖標本庫、病理標本庫しかない。私事で恐縮であるが、先日七尾へ講演に行った時、母校の七尾中学（現在の七尾高校）に立ち寄って明治四十四年（一九一一年）に建てられた木造の講堂の中を見せていただき、七十年前の中学時代を懐旧した。

現在の十全講堂、記念館が医学部創立二百年祭、三百年祭の際にも使えることを切に期待するものである。

（編集委員　山口　成良）